東京都三多摩公立博物館協議会会員名簿

館　名	住　所	電　話	交　通
東村山ふるさと歴史館	東村山市諏訪町1-6-3	042-396-3800	西武新宿・国分寺線「東村山駅」西口下車徒歩８分
八王子市郷土資料館	八王子市上野町33	042-622-8939	JR八王子駅南口から徒歩15分／JR八王子駅南口から「東京家政学院」行、「上野町三丁目」下車徒歩３分
府中市郷土の森博物館	府中市南町6-32	042-368-7921	京王線・JR南武線「分倍河原駅」から郷土の森総合体育館行きバス「郷土の森正門前」下車
町田市立博物館	町田市本町田3562	042-726-1531	小田急線JR横浜線「町田駅」から藤野台団地行きバス「市立博物館前」下車
青梅市郷土博物館	青梅市駒木町1-684	0428-23-6859	JR青梅線「青梅駅」下車徒歩12分
調布市郷土博物館	調布市小島町3-26-2	042-481-7656	京王相模原線「京王多摩川駅」下車徒歩５分
瑞穂町郷土資料館	西多摩郡瑞穂町石畑1962	042-568-0634	JR八高線「箱根ヶ崎駅」東口下車徒歩20分
奥多摩水と緑のふれあい館	西多摩郡奥多摩町原5	0428-86-2731	JR青梅線「奥多摩駅」から小河内方面行きバス「奥多摩湖」下車
福生市郷土資料室	福生市熊川850-1	042-530-1120	JR青梅線「牛浜駅」東口下車徒歩７分
武蔵村山市立歴史民俗資料館	武蔵村山市本町5-21-1	042-560-6620	多摩モノレール「上北台駅」から武蔵村山市内循環バス三ツ木地区会館行き「村山温泉かたくりの湯」下車徒歩１分
あきる野市五日市郷土館	あきる野市五日市920-1	042-596-4069	JR五日市線「武蔵五日市駅」下車徒歩17分
羽村市郷土博物館	羽村市羽741	042-558-2561	JR青梅線「羽村駅」西口下車徒歩20分／コミュニティバスはむらん羽村西コース「郷土博物館」下車
清瀬市郷土博物館	清瀬市上清戸2-6-41	042-493-8585	西武池袋線「清瀬駅」北口下車、徒歩10分／駅前バス乗場１番から西武バス乗車「郷土博物館入口」下車徒歩１分
立川市歴史民俗資料館	立川市富士見町3-12-34	042-525-0860	JR中央線「立川駅」南口から立川駅北口行きバス「農業試験場前」下車徒歩５分
檜原村郷土資料館	西多摩郡檜原村3221	042-598-0880	JR五日市線「武蔵五日市駅」から小岩行きか藤倉行きバス「資料館前」下車
日野市郷土資料館	日野市程久保550	042-592-0981	京王線・多摩モノレール「高幡不動駅」から百草団地方面行きバス「高幡台団地」下車徒歩５分
小金井市文化財センター	小金井市緑町3-2-37	042-383-1198	JR中央線「武蔵小金井駅」北口からココバス北東部循環13「小金井公園入口」下車徒歩５分
くにたち郷土文化館	国立市谷保6231	042-576-0211	JR南武線「矢川駅」下車徒歩８分
東大和市立郷土博物館	東大和市奈良橋1-260-2	042-567-4800	西武拝島線「東大和市」駅から西武バス（イオンモール行き）または都営バス（青梅車庫行き、箱根ヶ崎駅行き）で「八幡神社」下車徒歩２分／多摩モノレール「上北台」駅からちょこバス（外回り）で「八幡神社」下車徒歩２分
パルテノン多摩歴史ミュージアム	多摩市落合2-35	042-375-1414	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩５分
東京農工大学科学博物館	小金井市中町2-24-16	042-388-7163	JR中央線「東小金井駅」南口下車徒歩９分
江戸東京たてもの園	小金井市桜町3-7-1	042-388-3300	JR中央線「武蔵小金井駅」北口から西武バス「小金井公園西口」または関東バス「江戸東京たてもの園前」下車
たましん歴史・美術館	国立市中1-9-52	042-574-1360	JR中央線「国立駅」南口前
御岳美術館	青梅市御岳本町1-1	0428-78-8814	JR青梅線「御嶽駅」より約1.5km
東京都埋蔵文化財センター	多摩市落合1-14-2	042-373-5296	京王線相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩５分
集合住宅歴史館（都市再生機構技術研究所）	八王子市石川町2683-3	042-644-3751	JR中央線「八王子駅」・京王線「京王八王子駅」から宇津木台行きバス「ケンウッド前」下車徒歩５分
多摩六都科学館	西東京市芝久保町5-10-64	042-469-6100	西武新宿線「花小金井駅」北口下車徒歩18分／西武新宿線「田無駅」北口からはなバス「多摩六都科学館」下車
国立ハンセン病資料館	東村山市青葉町4-1-13	042-396-2909	西武池袋線「清瀬駅」南口から久米川駅行き・所沢駅行きバス「ハンセン病資料館」下車／西武新宿線「久米川駅」北口から清瀬駅南口行きバス「ハンセン病資料館」下車
八王子市こども科学館	八王子市大横町9-13	042-624-3311	JR中央線「八王子駅」・京王線「京王八王子駅」北口から西東京バス「創価大学循環（八日町経由）」・「杏林大学（左入経由）」・「みつい台」行き等「サイエンスドーム」下車徒歩２分
国立天文台天文機器資料館	三鷹市大沢2-221-1	0422-34-3962	中央線武蔵境駅から小田急バス「狛江駅行き」天文台前下車／京王線調布駅から小田急バス「武蔵境駅南口行き」天文台前下車

東京都三多摩公立博物館協議会会報

ミュージアム多摩

No.33

～特集　震災と博物館～

文化財レスキューの様子（岩手県陸前高田市）

2012.3
東京都三多摩公立博物館協議会

もくじ

特集「震災と博物館」

文化財レスキューに参加して　パルテノン多摩歴史ミュージアム　橋場万里子……1
協議会「震災と文化財」参加記　府中市郷土の森博物館　佐藤智敬……3
東日本大震災被災ミュージアム訪問交流に参加して　くにたち郷土文化館　齊藤有里加……4

平成23年度事業報告

企画委員会の活動　江戸東京たてもの園　髙橋英久……7
平成23年度企画委員会第１回研修会報告　調布市郷土博物館　金井安子……7
平成23年度企画委員会第２回研修会報告　くにたち郷土文化館　髙橋秀之……9
平成23年度企画委員会第３回研修会報告　くにたち郷土文化館　髙橋秀之……10

会員館活動報告

平成23年度の取り組み　東村山ふるさと歴史館……11
特別展「アウトローたちの江戸時代」の開催について　府中市郷土の森博物館……12
平成23年度の活動について　町田市立博物館……12
東京都指定有形民俗文化財「旧稲葉家住宅土蔵復原事業」　青梅市郷土博物館……13
企画展「京王線100年と調布」の開催　調布市郷土博物館……14
平成23年度活動報告　瑞穂町郷土資料館……15
奥多摩水と緑のふれあい館［活動報告］　奥多摩水と緑のふれあい館……16
「伝統文化ものつくり体験－多摩川製鉄体験塾－」を実施して　福生市郷土資料室……16
東日本大震災に思う　武蔵村山市立歴史民俗資料館……18
震災と最近の活動報告　あきる野市五日市郷土館……19
平成23年度の活動報告　羽村市郷土博物館……20
企画展「じいちゃの見たもの描いたもの～熊谷元一回顧展～」を振り返って
清瀬市郷土博物館……21
市有形文化財「小林家住宅」茅葺屋根葺き替え工事　立川市歴史民俗資料館……22
檜原村郷土資料館の現在の状況　檜原村郷土資料館……23
人が集う場所としての資料館　日野市郷土資料館……23
平成23年度活動報告　小金井市文化財センター……24
くにたち郷土文化館の最近の活動（展示を中心とした報告）　くにたち郷土文化館……25
震災と博物館　東大和市立郷土博物館……26
多摩ニュータウン40周年　パルテノン多摩歴史ミュージアム……27
平成23年度 事業報告「新規復元建造物の公開について」　江戸東京たてもの園……27
『多摩のあゆみ』第144号「戦後多摩の公民館活動」　たましん地域文化財団……28
平成23年度の広報活動について　東京都埋蔵文化財センター……29
平成23年度活動報告　集合住宅歴史館……30
特別企画「昆虫展～櫻井標本コレクション」　多摩六都科学館……30
国立ハンセン病資料館平成23年度企画展の紹介　国立ハンセン病資料館……31
地震時の状況と最近の活動報告　八王子市こども科学館……32
重要文化財指定とガイドツアー開始　国立天文台天文機器資料館……33

東京都三多摩公立博物館協議会会報

ミュージアム多摩　No.33

発行日　2012年３月31日
発　行　東京都三多摩公立博物館協議会
2011年度会長　日野市郷土資料館
〒191-0042　東京都日野市程久保550
印　刷　コロニー印刷
編集委員　あきる野市五日市郷土館　高畑民男
羽村市郷土博物館　松本美虹
清瀬市郷土博物館　古川百香
立川市歴史民俗資料館　斎藤　隆

☆ 特集「震災と博物館」

文化財レスキューに参加して

パルテノン多摩歴史ミュージアム　橋場万里子

■はじめに

東日本大震災による被災文化財の救出のため、文化庁が「文化財レスキュー事業」を立ち上げたのに伴い、日本博物館協会から人員の登録と派遣が要請された。これに応じて、当館では７月・８月に計２名の学芸員の派遣をおこなった。７月19日（火）～22日（金）にかけて陸前高田市に筆者が、８月１日（月）～３日（水）にかけて石巻市・南三陸町・気仙沼市に清水裕介学芸員が派遣され、レスキュー活動に従事した。また、三博協の東大和市立郷土博物館からは木村敏学芸員が、筆者と同じレスキュー活動に参加された。

本報告では、おもに筆者の体験から、文化財レスキュー活動の様子と課題等を報告したい（※清水学芸員の従事した南三陸町のレスキュー活動に関しては『季刊民族学』秋号（138）を参照のこと）。

■陸前高田市立博物館の民具資料の洗浄・整理

６名の学芸員全員が死亡・行方不明となった陸前高田市立博物館の15万点の博物館資料のうち民具類は、自衛隊によって市立生出（おいで）小学校に運び込まれた。資料は海水につかっており、暑くなってくると劣化が著しく進むため、迅速な洗浄が必要であった。

７月19日からの作業では、日本博物館協会チームとしてたばこと塩の博物館・東大和市立郷土博物館・山梨県立博物館・兵庫県立考古博物館・兵庫県立歴史博物館・三重県立博物館・斎宮歴史博物館・岐阜県博物館・当館の学芸員が派遣された。日博協チームは、宿泊先の北上から車で片道２時間の距離にある現地に通い、東京国立文化財研究所や国立歴史民俗博物館の職員とともに、国立民族学博物館・日高真吾教授のもと作業をおこなった。

【作業内容】

作業は、陸前高田市立博物館所蔵資料のうち、塩・砂・綿・紙くずなどがこびりついた民具類を洗浄・整理するのが主な目的であった。作業工程は下記のとおりである。

①体育館（７/19・20）・２階教室（７/21・22）にあった民具をグラウンドに運び出す。

②刷毛やブラシで砂を払う。資料の状況に応じて、強くこびりついた砂をエアダスタで吹き飛ばす。

③水洗いが必要なものは水洗い。

④新たに番号をふり、タグをつける。

⑤タグのついた資料や、資料の注記を撮影。

⑥資料名と注記・旧タグの有無をノートに記録（後で民博側がデータベースづくり）

⑦体育館に戻す。細かな資料は箱に入れて積み上げる。棚が届いたら棚に配架。

結果として、４日間で合計約550点の資料の洗浄・記録を終えた。体育館にあった分の民具すべてと教室１個分の資料の洗浄・記録が終了し、体育館に移動した。

■文化財レスキューを通じて思うこと

①文化財レスキュー参加者自身の意識変化

言うまでもなく、たった数日程度被災地に入っただけでは、支援の役に立ったとはあまり言えない。むしろ今回のレスキューでは、自身の意識が変化した部分のほうが大きかった。文化財レスキューは、被災地の支援活動のようでありながら、派遣館の職員の災害に対する意識を高める効果が非常に大きいと感じた。

関西の館のなかには、阪神大震災の被災経験があるためか、１回ではなく複数回にわたって職員が派遣できるように措置していた館もあった。被災経験による支援意識の高さはもとより、被災地経験を積む職員を増やしていくことで、派遣館自身の災害への地力を高めていく側面もあると思われる。当館で派遣を実現できたことは、学芸員自身にも、そして館にも良い影響を与えるのではないかと思う。

②レスキュー事業の課題

まず、課題として感じたのは、登録・募集の際の齟齬である。当初は具体的な作業が見えなかったため、支援の意思を持ちながら登録しなかった館も多いのではないか。また、特に初期には学術的専門性を要件とする募集が多かったが、現地でおこなう作業には学術的専門性が必須ではない部分も多い。より多くの人材がかかわるために、登録・募集要件を緩める一方で、博物館側も、ゆるやかな手の挙げ方ができれば良いかもしれない。

なお、文化財レスキューは被災文化財を緊急に救出する活動であるが、本当の意味で資料が救出されるまでには長い時間がかかる。１回限りで終わらない、息の長い支援をいかに構築していくか、自館の仕事をおこないつつ、支援を続ける体制づくりも必要と感じた。

③三博協における災害ネットワークの必要性

文化財レスキュー参加後、国立歴史民俗博物館で開催された報告会も拝聴した。その際感じたのは、自館が同じようなことになった時、果たして備えがあるか、ということであった。

大規模動員型の文化財レスキュー事業は災害直後には機能しない。むしろ被災直後には自館の対策や、近隣館や同種館との日常的なつながり・ネットワークが生きる。

立川断層を抱える多摩地域でも災害への備えは大きな課題と思われる。三博協のつながりで声をかけやすい素地を作るのはもちろん、近隣館にどのような「守るべき資料」や「役にたつ設備」があるのか、いざという時に連携できる素地があるのかについても、改めて三博協内でも話し合う機会が必要なのではないかと感じた。

生出小学校校庭

レスキューの様子

エアーで砂を吹き飛ばしている

新たな番号をふられた資料

校舎内の資料類

仮整理後の体育館

協議会「震災と文化財」参加記

府中市郷土の森博物館　佐藤智敬

東日本大震災における文化財や文化施設の被災について、当初は安全な避難、ライフラインや仮設住宅の整備、原発問題などにかくれていた。震災から約半年経過した９月時点でも、断片的な情報は紹介されていたが、その全貌を知る機会は少なかった。

現場写真など、さまざまな形で被災した施設を目の当たりにすることに加え、津波や瓦礫をかぶった資料を救出する文化財レスキューが被災地各所で行われているという情報はあった。そして、文化施設復興の動きも各所で活発化していく。６月12日には被災地でもある岩手県で。４月にオープンし、三陸地方を中心とした被災地支援にも積極的に取り組んでいる遠野市の遠野文化研究センターが主催の「文化による復興支援」シンポジウムが開催され、岩手県内でも被害の大きかった陸前高田市の博物館、大槌町の図書館の現状などが報告され、人命第一で瓦礫除去を行っているなかでいかに文化による復興が可能か、いち早く議論された。７月30日には国立歴史民俗博物館で「被災地の博物館に聞く」という特別集会が開催され、岩手県に限らず広範囲の博物館を巡る状況が報告された。９月24日には先述の「文化による復興支援」シンポジウムが、東京の国立劇場小劇場を会場とし、再度開催されている。

そうした中、東京都三多摩公立博物館協議会（以下「三博協」と記す）でも９月27日にたばこと塩の博物館学芸部長・半田昌之氏をお迎えし、氏が廻った被災地の文化施設の概況と文化財レスキューについての報告を聞く機会を設けてくださった。内容は半田氏が震災直後４月に福島～青森沿岸を巡った際および文化財レスキューの際の体験をもとにした報告であった。氏は日本博物館協会関係者でもあるため、被災地の博物館の状況を知る必要もあり、精力的に博物館施設を巡られた。震災直後の津波時、津波後の写真も含め、衝撃的な画像紹介とともに報告が続いた。また、文化庁や日本博物館協会をはじめとした組織が被災直後から資料のレスキューを行ってきたこと、そして三博協会員館職員のなかからもその協力者がいたことを聞いた際には、諸氏の行動を頼もしく感じた。

半田氏が訪れ、写真撮影しながらもその状況を画面で報告するのが憚られる、とおっしゃっていたのが印象的であった施設が、岩手県陸前高田市の陸前高田市立博物館である。同館は22年度まで６人のスタッフがいたが、23年度には津波で生き残った１人と震災後に採用された１人の計２人。復興に向けてのスタッフすら失われ、残った方々も被災者であるという現実に直面する。近くに併設する海と貝の博物館ともども、文化財レスキューによって資料は廃校などに一時避難され洗浄などが行われている。標本類などの一部は日本各地に送られ、修復作業が進んでいる。ただしそれらが将来どこに戻るのかは未定だという。この文化財レスキューは、阪神淡路、新潟の地震の際は３か月程度の期間であったが、いまのところ23年度いっぱい。しかしそれでも終わらないだろうとされ、膨大な量になるようだ。

それどころか、資料群の絶対数を把握するすべも少ない。実物や資料台帳、デジタルデータともに流出した場合、被災現場としても全体の情報把握が困難になる。しかし、洗浄や修復などのレスキュー作業は早急に続けていかねばならない。陸前高田市立博物館では（朝日新聞記事でも紹介されたが）、津波で行方不明となってしまった非常勤職員の制作・パウチ加工した収蔵資料のタグが津波を乗り越えて残り、資料そのものの再構築に役立っているという。職員の地道な整理作業の成果がそのような形で活用されたことを喜ぶべきなのだろうか。

それに加え、被災した文化施設職員の多くは避難所の運営など復興事業を優先せねばならない。また自身が家を流される等の被災者であることから、本来の業務に従事することができずにいる場合もある。

さらに公立施設のなかでも指定管理者が運営する施設では、決断が遅くなってしまい物事がなかなかすすまない状況が見られるという。さまざまな問題をかかえ復旧、復興にいまだに着手できない地域も多くあり、現状の対応は公立の施設についての支援が中心になっている。この構造をどうにかしなければいけないのではないかという提起があった。

もちろん、被災地は広域であり被災度合は施設によって異なる。被災後徐々に再開した館も出てはきたが、そもそもどのような範囲で、何が被災し、何が残っているのか、そして今後何が必要であるのかといったことを逐一確認しなくてはいけない館も多くあることを再認識した。これは博物館を中心とする文化施設に欠かすことのできない資料整理、収蔵管理作業がどのように行われてきたか、担当者不在（津波により行方不明等）の場合いかにそれまでの情報をまとめ、再構築できるのかといった、切ない課題をも浮き彫りにしている。

先述の「文化における復興支援」シンポジウムにおいて、遠野文化研究センター長の赤坂憲雄氏は、博物館に限らず、図書資料や路傍の石碑に至るまでさまざまな文化遺産が今回被災しており、それらの被災状況を把握するための緊急調査をする必要があると提起された。現状

必要とされているのは全体像の把握であるという点で、半田氏の報告と重なり、その実施が期待される。

文化庁、日本博物館協会、国立歴史民俗博物館、神奈川大学日本常民文化研究所、遠野文化研究センターなど、被災した博物館収蔵物や図書資料をレスキュー、補填できる体制づくりは、震災後半年をすぎた協議会時点でまだはじまったばかりであった。この原稿の執筆時には震災から10か月が経過しているが、半田氏が報告された状況はあまり変わっているとは思えない。自分たちの所属館が被災した場合どうするか？またその場合の再建は？レスキューされた資料が戻る場所は？今後の被災資料活用についてどのように考えていくのか？という重い課題も次々と提示された。

決して他人事とは思えない。筆者の勤務する府中市郷土の森博物館も東日本大震災時には展示室や復元建物、一部収蔵資料に破損が見られた。また施設が多摩川沿いに立地するため、府中市が想定する200年に一度の洪水時には本館が0.5～１ｍ、その他敷地内の一部では２～５ｍ浸水する可能性を持つことはすでに公にされている（平成22年発表、府中市洪水ハザードマップより）。そうした事態になっても極力混乱のないよう、いざというときの観覧者救出対策はもちろん、担当者に万一のことがあった場合に極力対応できるような資料整理、管理も想定しなくてはならないと感じた。そして三博協のような自治体を超えた横のつながりを強化することで博物館の災害時対応、復興をはやめる手段を構築していくことが望まれる。

そもそも地域博物館はその地域の文化等を収集、展示した情報の蔵であり地域の誇りのひとつであるべきだと思う。たとえ被災することがあったとしても、その博物館が復興することで人々の誇りを取り戻す、その価値を再認識してもらう存在であることを常にこころがけていきたい。半田氏の報告から改めて強く感じたことである。

≪付記≫

半田氏の被災地を巡った報告は「被災地を巡って」（『たばこと塩の博物館年報』第26号　2011）を参照されたい。

また、半田氏は「東日本大震災　博物館情報」というサイトを立ち上げ、京都橘大学の木下達文氏の情報をもとに青森～千葉県までの博物館の被災情報を公開している（http://japan-museum.com/index.html）。

また、国立歴史民俗博物館の「被災地の博物館に聞く」に関しては、執筆時点ではホームページに資料が公開されているものも参考になる（http://www.rekihaku.ac.jp/others/assembly.html）。

東日本大震災被災ミュージアム訪問交流に参加して

くにたち郷土文化館　齊藤有里加

３月11日の震災発生から約９カ月経過した12月初旬、甚大な被害を受けた岩手沿岸部の博物館と訪問交流する機会を得た。三多摩公立博物館協議会加盟館からは、くにたち郷土文化館・齊藤有里加、清瀬市郷土博物館・古川百香が参加した。今後のミュージアム防災の一助となるべく報告したい。

日時：平成23年12月３日（土）、４日（日）

主催：日本ミュージアム・マネージメント学会

１．訪問施設

①久慈市　久慈市久慈地下水族科学館「もぐらんぴあまちなか水族館」

②宮古市　岩手県立水産科学館

③山田町　山田町立鯨と海の科学館

④釜石市　釜石市郷土資料館

⑤大船渡市　大船渡市立博物館

２．視察概要

盛岡を出発し、岩手県沿岸部を久慈から陸前高田まで南下しながら沿岸部の博物館を視察した。12月現在において被災地の瓦礫は撤去されつつあり、道路の整備や店の営業活動の再開など復興の兆しが見え始めている個所もある。一方で南部に行くに従い広範囲の被害を受けている様子が確認され、山田町の大きな瓦礫の山や、広範囲に被害を受けた陸前高田市など、復興への長期的な支援を必要とする場面も多くあることが確認できた。

３．まちなかでの活動再開　久慈市久慈地下水族科学館「もぐらんぴあ」

久慈市久慈地下水族科学館「もぐらんぴあ」は国家石

油備蓄基地の作業坑を活用して開館していたが、震災により壊滅的な被害を受けた。閉館に伴い指定管理業者の職員は一旦離職となったが、緊急雇用創出事業により８月５日に市内の空き店舗を活用し「もぐらんぴあまちなか水族館」として再開した。もぐらんぴあでの水槽を集めて運営し、展示はタレントのさかなクンより提供された魚類、山形の加茂水族館から提供されたパラオ産のミズクラゲ、震災を乗り越えた魚たち等で構成されていた。被災した現地は視察時館内に水がたまっており、復旧のめどが立たず、次年度以降の予算計画、計画等は未定の状況であった。（付記：平成24年１月、元の場所において施設を平成25年度までに完成させ、平成26年度の再開を目指す方針となった。）

４．高台にあった博物館の24時間の対応　岩手県立水産科学館

宮古市にある、岩手県立水産科学館は岩手県から宮古市への指定管理となり、非常勤館長１名、職員２名、臨時職員で運営する館である。展示室内の展示品の崩落や水槽パイプが外れ、水が漏れだす等の被害があった。余震のため駐車場に避難したが、外に津波が見えた。当館は高台にあるため津波の被害は受けず、職員は避難住民のインフラ対応のために10日間寝泊りした。魚類展示用の水300ℓ、ガスボンベ、自家発電を活用し、トイレ対応、携帯電話の充電対応、指定避難所への案内を行い、５月31日まで無料開館、６月１日から入館料をとる形で運営を行っている。

魚類展示の魚は無料で魚を提供してもらい展示を行っていたが、地元の漁師の網、船がだめになり仮設住宅に入っている状況である。地元の方がお茶を飲みに来たり、魚を持ってきてくれる機会が減り、以前のような住民との親しみある関係維持が困難な状況にあるが、年間１万５千人利用のうち、半分くらいには入館者を戻したいと考えている。

訪問時は水中写真家による世界の海の写真展を実施。震災後写真家が水中にもぐって撮影した様子を同時に展示している。また市内５か所からの津波映像があり、これらの企画展等への活用に向けて考えている。最近は「津波は憎いけど海は好き」という言葉が増えてきた。心のケアは今後も必要だが、地域に残る漁具、海とのつながりを展示している館として、貢献できたらと考えている。

５．資料の流失と復興のシンボルとして残ったマッコウクジラ　山田町立鯨と海の科学館

山田町立鯨と海の科学館は「鯨」と「海」をテーマにした科学館であるが、３階建ての建物の２階まで津波により浸水し、多くの資料・標本が流失した。自然資料が多くあり、平成22年12月に寄贈された約８万２千点（押し葉標本８万点、液浸標本２千点）の海藻標本は搬入終了した１週間後に震災が発生。地下の液侵標本、プレハブの改装標本室は壊滅状況となり、７万点近くが失われた。３階天井から吊されていた世界最大級の鯨の実物大模型は難を逃れ、１階天井から吊り下げられていたマッコウクジラとミンククジラの骨格標本は泥をかぶったものの大きな破損はなかった。

現在、鯨と海の科学館横は瓦礫置き場となり、復興には時間がかかる見通しとなっている。付近にカキ小屋もでき、復興に向けて明るい見通しも出来てきたが、復興のシンボルとして残された骨格標本を活用し博物館を再建する際、既存のコンセプトか、新しい仕切りのテーマとするのか、博物館の今後の機能の検討が必要となっている。

６．津波資料展期間中の被災と文化財レスキュー　釜石市郷土資料館

釜石市は郷土資料館、戦災資料館をもち、一部の資料は廃校の教室へ収蔵している。郷土資料館では津波資料展の実施中に震災に遭った。大津波警報発令後、郷土資料館職員も、戦災資料館職員も津波襲来前に避難し無事であったが、戦災資料館は全壊となった。廃校に置いた民俗資料は70～80cmくらいの侵水があり、被災した。４月より職員はそれぞれ被災者支援等の業務に当り、資料館はボランティアセンターが近設され、物資を収納する場所となり休館となった。（付記：平成24年１月28日より部分開館開始。）文化財レスキューは、７月より着手し、岩手県立博物館、遠野市、山形文化遺産防災ネットワークから協力を得た。瓦礫を片付けながら資料を抽出し、艦砲射撃の砲弾は自衛隊に運んでもらい、脱塩処理をおこなった。レスキュー方法は確立されておらず、手探りの作業となった。訪問時の担当者から、資料はそこが安全だと思って集めても、被災する可能性からは逃れられない。資料のデジタルアーガイブ化、最悪データだけでも残す姿勢が重要である。資料台帳や簡単なデータベースはあったが、複数の場所に保管などの対策が必要だと感じているとのコメントが述べられた。

７．開館後の模索　大船渡市立博物館

大船渡市は様々な化石が産出する地域であり、大船渡市立博物館は地学標本、考古資料、民俗資料が数多く収蔵されている。当日は地域寸断のため、館は孤立し当日の職員は近くの民宿に避難した。被災状況は、表向きは大きな展示の損壊もなく無事に見えるが、外部の収蔵庫が津波で浸水し、民俗資料特にワラ素材の資料の多くが廃棄となった。７月１日までは地域の復旧に回り、博物館の片付け等は後手となった。発生から７月14日まで休館となったが、12月現在、地域住民の学習活動も芽生え

つつある状況にある。子どもの文化活動やスポーツについても積極的に行いたい状況にあり、学校対応等は大阪市立博物館で活動する、なにわほねほね団など県外に協力をしてもらっている。

震災後被害調査に立ちまわれない中で、依頼するにも被害のリストも作れない状況にあった。震災後は泥棒や盗難の話もあり、レスキューの電話が来てもその人に任せて良いのか、顔のつながりがある人でないとなかなかお願いすることはできなかった。①先ず袋に資料を詰める、②旧来の頼める人の名前を明示して、そのルートでやってもらう事とした。また、震災関連の資料収集については、三陸沖地震と震災とはそれぞれ別の趣旨であると認識している。三陸沖地震については様々な分野から調査が行われている状況であり、今回の研究情報が落ち着いてきたらストックして展開することが必要と考える。震災については時計の持ち込みなどもあるが、瓦礫、波にもまれた車など、どこからが被災資料なのか判断が難しい面があり模索している状況にある。

8．視察に参加して

上記に加え、最後に立ち寄った陸前高田市では津波に襲われた避難所と隣接する文化施設の状況を見て、言葉にならなかった。今回の視察では、普段から情報交換を行う姿勢の大切さを改めて認識した。被災した館の職員はまずは地域の救援に従事するため、資料の復旧に着手できるのはかなり後にならざるを得ない。野外に資料が流失している状況で手が出せず、その間頼める人、連絡できる人を把握しておく事が資料救出の要であると強く感じた。多忙で近隣の企画展にもなかなかうかがえない状況もあるが、お互いの顔の見える三多摩の学芸員であることが大切だと考える。また、博物館は開館することで人が訪れ地域が明るくなること、人々の心に余裕と憩いを与える場所であることを実感した。沿岸の博物館が子どもたちに再び「海が好きだ」と言ってもらえるような展示が行えるよう願ってやまない。主催となった日本ミュージアム・マネージメント学会及び研究部会の皆様には大変お世話になった。また視察に同行くださった遠野市の小笠原晋氏は遠野市の後方支援の取り組みや各地域のレスキュー状況について現地解説いただいた。深く御礼申し上げたい。

※今回の報告は平成23年12月の訪問時での内容である。その後状況が変化した点については校正時に付記を行った。

参考
文化環境研究所(2011) “特集文化財の保存と再生”カルチベイト、38号
国立科学博物館ホットニュース (2011)
岩手県立博物館で行っている被災文化財等救援事業の概要
http://www.pref.iwate.jp/~hp0910/news/rescue/rescue.htm
山田町立鯨と海の科学館の被害
http://www.kahaku.go.jp/userguide/hotnews/theme.php?id=0001311305304351&p=2

街中で再開したもぐらんぴあ

瓦礫の残る鯨と海の科学館

展示室が物資置き場となった釜石市郷土資料館

☆ 平成 23 年度事業報告

企画委員会の活動

企画委員長　髙橋英久（江戸東京たてもの園）

東京都三多摩公立博物館協議会では加盟館より、有志による企画委員を推挙、任命しさらなる協議会での充実した活動を行うための内容の検討及び企画の実施を行っています。

本年度は10館より11人のメンバーが推挙され、６月10日の第１回企画委員会の開催において、企画委員長（江戸東京たてもの園・髙橋英久）を選出し、また各委員を①研修会班、②ホームページ班、③多摩の博物館さんぽ班に役割分担し、各班単位で活動しました。

①研修会班は、年度内３回実施される研修会の内容を精査し、会場、講師、内容等の調整を行うと同時に研修会当日のセッティング等に携わります。研修会の詳細は別稿にある通りですが、本年度は昨年度から継続し千葉県博物館協会との連携活動として、浦安市郷土博物館への視察（第１回）、合同シンポジウム（第３回）を実施しました。また多摩地域内（国営昭和記念公園）における古民家の整備と活用についての研修(第２回）を行いました。

②ホームページ班は、昨年度、多摩・島しょ広域連携活動助成金を受け協議会のホームページを立ち上げましたが、今年度はさらに発展させデジタルアーカイブを作成しました。本事業は加盟館の収蔵資料の画像を高精細デジタルデータとし、利用者がウェブ上で当該資料の画像を詳細に閲覧できるようにしたものです。また、多摩・島しょ広域連携活動助成金の年限である平成24年度に関しては、多摩地域というスケールメリットを活かしたより横断的な情報を集約するデータベースの作成を計画しています。

③『多摩の博物館さんぽ』班は、当年度の10月～翌年３月までの年度下期号および次年度４月～９月の上期号と、年度内２回の情報誌『多摩の博物館さんぽ』を編集しています。内容は加盟館の展示会やその他イベント情報を集約しているものであり、多摩地域の博物館愛好者にとって大変好評です。

平成23年度の活動内容は各班、前年度に引き続きというものですが、特筆すべきは、他団体（千葉県博物館協会）との連携事業により他地域での博物館関係者との関係性を築いたこと、また各加盟館が所蔵する特徴的な資料もしくは多摩地域特有の資料を集約し、ホームページ上で公開したことが挙げられます。一方で外部への広がりを、また一方で内部での充実を図るきっかけを作れたのではないかと思います。今後さらに継承し、発展させていきたいと考えています。

また昨年は未曽有の惨劇により日本全体が大きな悲しみを経験し、大きな課題を残しました。博物館においても同様で、貴重な文化財を次世代に継承していくためにさまざまな対策を講じなければならないでしょう。その一つとして博物館同士の横のつながりが重要です。情報と共に人とのつながりを三博協の中で築いていくための一助として、企画委員会が機能していければ幸いであると、本年度は改めて考えました。

平成23年度企画委員会第１回研修会報告

企画委員　金井安子（調布市郷土博物館）

第１回研修会

・テーマ

「博物館が地域にできること－浦安市郷土博物館の取組みについて－」

・実施日　平成23年７月13日（水）

・会　場　浦安市郷土博物館

・参加者　19名

◆開催主旨

東京都三多摩公立博物館協議会の企画委員会と千葉県博物館協会の調査研究委員会は、平成22年度から「博物館が地域にできること～子ども達のために～」というテーマを設定し、共同でアンケート調査を実施し、合同の研修会を開催してきました。

平成23年度は、両会の交流を活かし、三博協の第１回研修会として、浦安市郷土博物館の施設を見学し、学校や地域に対する取組みについてお話を伺いました。

◆浦安市郷土博物館の概要

浦安は、かつては東京湾の漁師町でしたが、昭和46年の漁業権全面放棄以後、海面の埋め立てが行われ、新しい都市へと変貌を遂げました。これを契機として、貴重な郷土資料の散逸を防ぐために、給食センターの建物を転用して、昭和55年に「郷土資料館」が開館しました。しかし、収蔵・展示・学習スペースが絶対的に不足し、資料館本来の目的を達成することができませんでした。そ

こで、平成13年４月１日に新たに「郷土博物館」が建設されました。

浦安市郷土博物館は、①市民参加をモットーとした「すべてに開かれた博物館」、②体験を重視した「生きている博物館」、③いつきても新しい発見のある「リピーターの呼べる博物館」、④博物館も学校とする「学校教育に生かせる博物館」の４つの基本コンセプトを掲げ、様々な体験プログラムや事業を行っています。

屋外展示では、民家が軒を連ね、漁師町として活気があふれていた昭和27年頃の浦安にタイムスリップすることができます。屋内展示では、浦安の海で使われていた船や船大工の道具が展示され、ベカ舟製造の実演も行われ、また、海とともに生きてきた浦安の人びとの暮らしが紹介されています。

朝顔が咲く外流し

◆博物館の取組み

研修会に先立ち、ちょうど幼稚園の年長組の団体見学があり、博物館のご好意により、団体対応の様子を企画委員会で見学させていただきました。教員から出向しているスタッフが、見事な「つかみ」で子どもたちに説明を始め、後で伺ったところでは、子どもたちに対する展示解説の技術は、学芸員よりも先生の方が優れており、また時期によっては団体見学が集中するため、専門スタッフに対応をお願いしているということでした。屋外展示ではボランティアの協力を得て、子どもたちが浴衣を着せてもらい、昔の遊びに興じ、ベカ舟に乗せてもらっていました。三博協の企画委員も飛び入りで独楽まわしの指導に参加させていただきました。

博物館には、「もやいの会」というボランティアの組織があります。「もやい」とは、船と船を係留するための丸太（カシ棒）を結ぶことを「船をもやう」といい、それに由来しているそうです。漁師町としての浦安の歴史や市民と博物館のつながりを象徴するネーミングです。「もやいの会」のメンバーは、元漁師の方がベカ舟乗船の体験を指導するというように、豊かな経験に基づいて活動しています。ボランティアの休憩スペースには、市長からの差し入れのお茶菓子がさりげなく置かれ、遊び道具の独楽やお手玉はボランティアのお手製の巾着袋に一つひとつ入れられているなど、博物館のボランティアに対する心くばりやボランティアの方々の細やかな心づかいが窺われました。

ベカ舟乗船の体験

浦安市は、平成23年３月11日の東日本大震災により液状化の被害が発生した地域です。漁師町だった地域は被害を免れたそうですが、ディズニーランドのブランドイメージに象徴されるような、かつての海面を埋め立てた地域では液状化現象が起こりました。浦安の海とともに生きてきた人びとの暮らしを伝える博物館は、埋立地に引っ越してきた人びとにとっては、必ずしも身近な存在ではなかったようです。しかし、仕事の現場の第一線からリタイアする時期を迎えて、自分たちが住んでいる地域に目を向け、地域で活動する人びとが増える傾向にあるそうです。

千葉県博物館協会の調査研究委員会との交流がきっかけとなって、有意義な研修会を実施することができました。

平成23年度企画委員会第２回研修会報告

企画委員　髙橋秀之（くにたち郷土文化館）

1　研修会テーマ

「古民家の整備と活用　－国営昭和記念公園こもれびの里での事例から－」

・実施日　平成23年11月10日（木）
・会　場　国営昭和記念公園　こもれびの里
・参加者　37名

2　開催趣旨

東京都三多摩公立博物館協議会では、古民家を所有・管理している館が複数あり、整備や活用に際して共通する課題があると思います。そこで第２回の研修会では、「古民家の整備と活用」をテーマとして、国営昭和記念公園こもれびの里を見学し、古民家の整備状況や今後の活用についての話を伺いたいと思います。

こもれびの里は、昭和記念公園内に昭和30年代の武蔵野の農村風景を再現し、「昭和・武蔵野・農業」をテーマに、農業や年中行事などの体験を通じて自然と暮らしの知恵を伝えることを目的としています。平成19年に開園し、農業体験などさまざまな体験イベントやボランティア活動が行なわれています。

現在、こもれびの里内の古民家エリア（平成25年公開予定）が整備中で、狛江市やあきる野市から古民家を移築し整備作業が行なわれています。このエリアを実際に見学しながら、これまでの整備作業や今後の活用について詳しく話を伺いました。

3　研修会内容

まず、こもれびの里の活動拠点になっている「里の小屋」にて、古民家工事の概要や移築・復原においての方針などについて、正田建築設計の正田徹雄氏より説明していただきました。「茅葺」と普段呼んでいる「茅」について、一般に茅という植物はなく、ススキやヨシ、稲ワラなどの屋根に葺かれるものの総称であるという説明や「復原」と「復元」の違いについて、復原作業における消火設備などの設計方針など、設計・建築の担当者としての経験談をおうかがいしました。

その後、工事を担当されている砂川建設株式会社の協力のもと、整備中の主屋や内蔵を国営昭和記念公園事務所の佐藤慎一氏と正田氏の御案内のもと、見学させていただきました。

土壁の作業風景や床下の状況、さらにはなかなか経験できない茅葺作業中の屋根を間近に見せていただくなど、充実した研修会となりました。

説明をしていただいた正田氏と佐藤氏

茅葺作業の見学風景

作業風景

平成23年度企画委員会第３回研修会報告

企画委員　髙橋秀之（くにたち郷土文化館）

１　研修会テーマ

東京都三多摩公立博物館協議会・千葉県博物館協会
合同シンポジウム
「博物館・美術館が地域にできること
～子ども達のために～」

・実施日　平成24年１月19日（木）
・会　場　千葉県立中央博物館　講堂
・参加者　72名

２　開催趣旨

千葉県博物館協会調査研究委員会および東京都三多摩公立博物館協議会企画委員会では、平成22年度に合同で、「博物館が地域にできること～子ども達のために～」というテーマを設定し、共同で情報把握をするために加盟館へのアンケート実施や両会からの事例報告などを行いました。

今年度におきましては、昨年度の両会の交流を活かし、第１回研修会では、浦安市郷土博物館の施設見学と学校や地域に対しての取り組みについて、お話を伺いました。

第３回研修会では、昨年度から上記テーマに基づき合同研究を行ってきたそのまとめといたしまして、合同シンポジウムを開催いたしました。子ども達にとっての博物館・美術館はどうあるべきか、行政や学校、博物館や美術館などの意見を交えながら、様々な具体的な取り組みや課題などについて事例報告やパネルディスカッションを実施しました。

３　研修会内容

午前中は、参加希望者で合同シンポジウムの会場である千葉県立中央博物館を見学いたしました。見学の冒頭に、千葉県立中央博物館教育普及課長の新和宏氏より、現在行われている「科博コラボ・ミュージアムin千葉　恐竜アロサウルスとその時代の生き物たち」の関連事業について、説明していただきました。

「アロサウルスがつなぐ地域の絆」として、千葉県内の博物館と百貨店などの企業と連携して、子どもたちを中心に、チケットの半券や百貨店のカードを提示するとプレゼントやサービスが受けられる事業を展開しているとのことでした。

午後の合同シンポジウムでは、基調講演として、文化庁文化財部美術学芸課長の栗原祐司氏より「地域と博物館」をテーマに、博物館の定義や役割、変遷など、実際の事例などを交えた内容でした。その後、事例報告として、千葉県立中央博物館教育普及課長の新和宏氏より、「博物館教育の活性化に関する課題と提言―誰のための教育かを真剣に考える―」として、千葉県立中央博物館における学習プログラムなどについての報告。千葉市美術館学芸員の山根佳奈氏は、子どもたちに行っている鑑賞教育とそれに関わるボランティアの体制などについて報告がありました。

三博協側として、東村山ふるさと歴史館（八国山たいけんの里）学芸員の石川正行氏からは、ほんかく体験や、ちょこっと体験として、様々な事業を行い、ちょこっと体験で学習効果の薄いものについては、「対話」でフォローするなど対応していることなどについての報告。国立ハンセン病資料館学芸課長の黒尾和久氏からは、他の博物館とは違い、人権博物館ということから、子ども達にとっては楽しげな空間ではないが、展示や語り部の人たちとの交流から、知識を得るということより、なにが問題なのか、どうしたらいいのかなど、子どもたちが資料館を通して、自己を見つめる場としての活動についての報告がありました。

事例報告後には、パネルディスカッションとして、国立歴史民俗博物館教授の小島道裕氏がコーディネーター、東京成徳大学日本伝統文化学科教授の青柳隆志氏と我孫子市立布佐南小学校校長の斉藤仁氏をパネラーに加え、「博物館・美術館は子ども達に何ができるか？」をテーマに行いました。

見学会の様子

ディスカッションの様子

☆ 会員館活動報告

平成23年度の取り組み

東村山ふるさと歴史館

平成23年度、東村山ふるさと歴史館では４つの企画展と各種事業を行った。

企画展では、収蔵品展「押絵羽子板」を４月29日（祝）～７月10日（日）に開催した。市内の川島人形店「はなびや」からご寄贈いただいた押絵羽子板製作関連資料約１万７千点を、資料目録的内容の図録として刊行し、初公開した。付随事業として、展示説明会及び押絵づくり、羽子板づくり、絵柄に関連して説経節「曽我五郎」を実施した。

押絵羽子板「曽我五郎」

企画展「あんだって？文化財」は７月24日（日）～９月11日（日）に開催された。市内の指定文化財を中心に、種別やエリアごとの文化財紹介、ランキング、クイズ・パズル、人気投票などのハンズオン展示を行った。

付随事業として、勅使河原彰氏による講演会「イギリスのナショナルトラストと日本の文化財保護」、当館学芸員による「旧跡指定記念東京陸軍少年通信兵学校跡地」をそれぞれ実施した。また、企画展に関連し、ハンディサイズのオールカラーの文化財ガイドブック「ひがしむらやまぶんかざいめぐるっく」を発行、頒布した。

秋の企画展「狭山丘陵からみた古代の東村山　瓦塔の建つ風景」を、10月８日（土）～12月18日（日）に開催した。市内多摩湖町出土の瓦塔や東山道武蔵路を切り口として、あまり知られていない東村山の古代について紹介し、同名の展示図録を刊行した。

付随事業として、吉村武彦氏（明治大学大学院長）による特別講演会「古代の東国と武蔵」と、当館学芸員による講座を行なった。

例年開催の「なつかしい暮らしと道具たち」は市内小学校15校を対象とした社会科見学に対応した展示として１月13日（金）～３月４日（日）に開催された。東村山市は現在児童数が増しているため、学校によっては、100人以上の児童の見学となってしまう場合もある。また、遠距離の学校にはバスを配車し、歴史館への見学の便宜を図った。毎年ながら、この冬は毎日こどもたちの声が展示室から聞こえていた。

また、ふるさと歴史館では、年中行事関連の事業や講座などさまざまな事業を実施した。

東大和市立郷土博物館共催の事業である「狭山丘陵市民大学」が秋から冬にかけて実施した。今回のテーマ「狭山丘陵の原風景－自然の中でのムラの暮らし」とし、11月20日（日）の第１回目は、八国山での見学と東村山市八国山たいけんの里で歴史館学芸員が下宅部遺跡の漆関連講座を実施した。12月10日（土）の第２回目は、東大和市立郷土博物館で多摩湖の原風景の講義を東大和市立郷土博物館の学芸員が実施した。１月21日（土）の第３回目は、武蔵村山市立歴史民俗資料館周辺の見学を予定していたが、雨天のために資料館内での講義と見学を行った。この回は、武蔵村山市立歴史民俗資料館の学芸員の方に非常にお世話になった。ここであらためて感謝を述べたい。今回は市外の話題であり、その半面参加者自身の地域の話題であったことから、参加者に好評な見学会であった。今後は是非この事業を発展させて、巡回展示なども実施したい。

縄文ジャンボカルタ取りのようす

一方、分館である八国山たいけんの里では、開館２周年を記念したアニバーサリーイベントをはじめ、毎月のテーマに基づく、「ドングリトトロづくり」や「土偶だるまづくり」、「マイはしづくり」などのちょこっと体験と、「親子縄文土器教室」や「干支の革ストラップづくり」、「夜の昆虫採集」、「こども草木染め」などのほんかく体験を実施。

また、新たな試みとして、夏休み中の夜間開館し、サポートボランティア「はっちこっくメイト」昔語りグルー

プによる怪談「東村山のこわ〜い話」や、遺跡公園『下宅部遺跡はっけんのもり』のイベントの一環で、「縄文ジャンボカルタ取り」なども実施した。

特に７月に行った「859ナイト・縄文のあかり」イベントでは、ペットボトルと和紙でランタンを作成し、たいけんの里の中庭に設置、縄文紙芝居や日没後のライブコンサートを経てランタンに明かりを灯すイベントを実施した。このイベントは若手のクリエイターが中心となって企画・運営されて、好評であった。

また、狭山丘陵いきものふれあいの里センターとの共催事業や、西武・狭山丘陵パートナーズとの連携事業など、周辺の団体とのコラボレーション企画も実施した。

以上、ふるさと歴史館、たいけんの里ともに、展示および講座や講演会、体験学習を各種実施しており、引き続き来館者サービスを提供していきたい。

特別展「アウトローたちの江戸時代」の開催について

府中市郷土の森博物館　花木知子

平成23年４月29日から６月26日にかけて開催した、特別展「アウトローたちの江戸時代」では、今まで展示で取り上げられることが少なかった「アウトロー」という存在にスポットをあて、江戸時代後期を捉えることを目的とした。江戸時代に甲州街道の宿場町であった府中は、人や物が集まる地域の中心であった。そこに集まる様々な「アウトロー」と、そこで暮らす人々との関係を通して、新しい視点から府中宿を紹介したいと考えた。

展示構成は、Ⅰ描かれたアウトロー、Ⅱアウトローをめぐるトラブル、Ⅲ追われるアウトローたち、Ⅳ世情騒然・幕末の多摩地域とアウトローとし、Ⅰで浮世絵等に描かれた「アウトロー」を紹介し、Ⅱで村の人々とのトラブルと村の対処法、Ⅲで幕府の取締り、Ⅳで幕末の社会不安の中で変化する村の秩序について展示した。

「アウトロー」は、近年定着しつつある用語である。最近は、集団の中で独自の行動をする人に用いるなど、やや拡大解釈される傾向にあるが、本来は犯罪者や無法者、社会秩序からはみだした者を指す言葉である。どのような存在が無法者で、何をもって社会秩序とするのか、江戸時代における「アウトロー」の定義は、本展示の要点であった。狭義に捉えれば、囚人や博徒などを中心に展示を構成すべきであったが、最終的に「宗門人別改帳」から名前を削除された無宿や、各地を巡り歩く宗教者、芸能民、浪人も広義の「アウトロー」として取り上げた。これは、江戸時代の秩序の主流が、人々が定住して暮らす村や町にあると考えた場合、そこから外された者や、村に訪れる異なる秩序を持つ者たちは、村にとっては秩序の外にいる「アウトロー」であると位置付けたことによる。また、彼らの存在は村々にとって大きな問題となっていたため、当時の社会を考える上で必要だと考えた。

この結果、虚無僧や六十六部、座頭・瞽女等、身分的周縁に位置する人々を紹介できたことは、本展示の１つの成果であると考える。反面、広義に定義したことにより視点が分散し、展示全体を通しての「アウトロー」像がつかみにくくなってしまった。また、博徒の展示だと思い来館された方には、物足りない展示となったことも否めない。

会期中、関連企画を含めると約4,200人の観覧者を得た。私感ながら今までに比し若い方が多く、客層も少し異なったように思う。奇しくも当館と同時期に、パルテノン多摩歴史ミュージアムでも博徒・一ノ宮万平を取り扱った展示が開催された。地域博物館における「アウトロー」の展示は管見の限り例がなく、多摩地域の博物館２館がそれを行ったことは意義深いことだと思う。「アウトロー」に関する調査研究は、新たな江戸時代の社会の解明に繋がると考えており、本展示会がその一助を担えたとしたら幸いである。

平成23年度の活動について

町田市立博物館　矢島律子

平成23年度は波乱の幕開けでした。３月19日開催予定の巡回展『美は掌中に在り－中国の小さなやきもの』展が３月11日に発生した東日本大震災の影響によりいったん中止となりました。３月11日は、その前の展覧会が閉幕し撤収作業が終了した翌日であったので、展示室には入館者がおられなかっただけでなく、資料はすべて収蔵庫に納入済みでしたので、大きな被害はありませんでした。しかし、壁際ケース天井の照明用ルーバーが10枚近く落下して損傷しました。修理と今後の事故対策のための工事が喫緊の課題である上に、余震が続くなかでの陶磁器の展示作業が危険であること、計画停電時の展示室内の代替電源確保が難しいことから、いったん展示中止と休館を決めました。ポスター・チラシの送付、図録作成まで済んでいましたので、大変に残念なことでした。その後事態が安定し、一応の対策（展示ケースの補強、ガラス飛散防止フィルム貼付等）が済んだこと、御所蔵者

の理解が得られ、また、次会場での開催日まで余裕があったことなどの好条件が重なり、６月４日から７月３日まで再開することが出来ました。さまざまな考え方がありましたが、心を解きほぐすために少しでも豊かな文化的な時間や空間を皆様に提供するというのが町田市の考えでした。１日平均70人の来館者がありました。

夏季開催された『開窯300年　マイセン　西洋磁器の誕生』展は１日平均125人の来館者がありました。夏休みに併せて、多様なイベントを開催するという仕組みが当館に定着してきており、19～20世紀初頭のマイセン磁器を中心に販売した２回のスペシャル・ショップ・デイ、夏休みこども絵付け教室「西洋絵付けに挑戦しよう」、展示室内でチェンバロ、ヴァイオリン、リコーダーの演奏を行うコンサート「マイセンとともに楽しむバロック音楽の夕べ」等、どれも好評でした。

続いて10月８日から11月27日まで開催した『江戸切子－日本のカットガラスの美と伝統－』展も１日平均122人の来館者がありました。東京カットグラス工業協同組合の協力を得て、６回行った「体験講座－初めてのカットグラス」では、家族での参加も多く、60人までの整理券が１時間ほどで出払ってしまう盛況振りでした。

『マイセン』展及び『江戸切子』展はどちらも美術工芸の展覧会であることから、「工芸を体感すること」を意識してイベントを企画しましたが、企画側の意図が参加者に伝わっている様子は、展覧会期間中に実施したアンケート調査から知ることが出来ました。

12月６日から１月15日までは『笑いの中に～幕末・明治の戯画・風刺画』を開催し、当館所蔵の田河水泡コレクションの幕末から明治の錦絵等を中心に展示しました。新年に向けて前向きなイメージをと担当者が工夫した展覧会で、年末年始をはさむ短期間の展示にもかかわらず、１日平均85人の来館者がありました。

３月11日の東日本大震災直後は、今年度の博物館運営について悲観的な雰囲気が強くありましたが、震災数ヶ月以降、来館者の文化的なもの、心を慰めるものへの希求が逆に強くなっていることが感じられるようになりました。蓋を開けてみれば、今年度の入館者は10年ぶりの多数となりました。

学校との連携事業も行いました。桜美林大学マネージメント学科山口有次教授研究室の協力を得て、町田駅前街頭および市内博物館施設において「ミュージアム・アンケート」を実施し、来街者や来館者の動向を調査しました。

また、町田市立金井小学校と連携し、学校における事前授業を行ったうえで小学生たちが来館し、実物を見て鑑賞する、という美術教育を行いました。

現在、町田市立博物館は新しく生まれ変わるための準備を進めています。2008～2009年度の庁内組織による「町田市博物館等の在り方検討委員会」、2010年度の外部有識者による「町田市の博物館等の新たな在り方構想検討委員会」によって、町田市の博物館機能全体について検討が行われ、より良き発展のために現在の町田市立博物館をどう変えていくか、その方向が打ち出されました。本年は基本構想に向けて検討が行われました。来年度以降は、さまざまな試みを盛り込んだ展示事業を展開してその成果と反省点を踏まえつつ、具体的な新博物館像を構築していく予定です。

東京都指定有形民俗文化財「旧稲葉家住宅土蔵復原事業」

青梅市郷土博物館　鈴木章久

当主である稲葉家は、江戸時代に青梅宿の町年寄を勤めた家柄であり、材木商を営むかたわら、青梅縞などの仲買問屋も行っていました。商いが最盛期だった文化・文政期には、江戸に支店を構えるほどになり、稲葉家が江戸時代後期において、青梅でも有数の豪商として活躍していたことを物語っています。

建物は、昭和55年４月、青梅市が所有者から寄贈を受けました。建築年代を確定する資料はありませんが、建物の構造から見て、江戸時代後期の文化年間（1804～1818）前後に建てられたものと推定されます。

店蔵、土蔵、門、井戸等から構成されており、これらを取り巻く空間が青梅の宿場商人の生活をうかがい知る

ことのできる貴重な民俗資料であるということから、昭和56年３月に東京都の有形民俗文化財に指定されました。

復原工事を行う土蔵は、建物の腐朽や損傷が著しく、建物の一部が崩壊し始めたことから、平成14年３月に解体されており、この度、平成22年度から24年度の三ケ年事業として復原工事が実施されております。

復原にあたり、復原計画の再検討、解体部材の調査を経て、基礎工事、木工事、左官工事、屋根工事等の建物の組立が行われております。

工事は平成24年度まで引き続き実施していますので、完成まで楽しみにお待ちいただければと思います。

解体前の土蔵

復原工事中の様子

復原工事中の様子

企画展「京王線100年と調布」の開催

調布市郷土博物館　平　自由

多摩地域南部の主要な鉄道である京王線は、東京と八王子を結ぶことを目指した京王電気軌道株式会社によって、大正２（1913）年に笹塚―調布間の開業に始まりました。それから１世紀を前にして、調布市はさらに大きく変わろうとしています。市内では、現在、京王線の地下化工事が進み、完成すると東から国領駅、布田駅、調布駅の３駅が地下駅となり、地上の街の様相も一変することになります。

このような機会に調布市郷土博物館では、京王線とともに歩んできた歴史を振り返る、企画展「京王線100年と調布」を６月28日から10月10日の期間で開催しました。

今回の展示では、開業頃の調布の様子を調布出身で南多摩郡長を務めた原豊穣の日記や公文書から探るとともに、車両や駅、踏切の変遷を写真や模型で紹介しました。また、戦前に東京近郊の行楽地として賑わった多摩川原遊園や京王閣を、沿線案内や絵葉書から見るなど、京王線と多摩地域の１世紀の歴史を紹介しました。

この展示に関連して、夏休みの自由研究向けに「子どもはくぶつかん」として２事業を実施しました。

「親子で探検！京王線の線路跡をたどる」では、開業から昭和２年に現在の軌道位置に変更され廃線となった、仙川駅から調布駅までの5.3kmの旧軌道の名残を確認しながら歩きました。

「バスツアー　親子で行こう！京王資料館」では、京王電鉄のご協力の下、普段は見学できない京王資料館を見学させていただき、屋外に保存されている昔の車両の運転席にすわって運転手気分を味わいました。

企画展「京王線100年と調布」展示風景

平成23年度活動報告

瑞穂町郷土資料館　近藤春香

昨年度は、東日本大震災という大規模震災に見舞われ、瑞穂町でも少なからず、影響を受けました。

しかし、幸いにも瑞穂町郷土資料館では町指定文化財及び収蔵資料等に影響を受けず、「郷土を知り、郷土を愛し、郷土を大切にする心を育てる」の活動目標のもと、日々努力しております。

震災に被災された方々には心からお見舞い申し上げると共に復興に尽力される皆様には安全に留意されご活躍されることをお祈りいたします。

平成23年度活動報告～企画展～

瑞穂町は江戸時代に青梅市成木から石灰を運ぶ道が整備され（現：青梅街道）、また八王子より千人同心の日光謹番のための道が整備され（現:日光街道（日光脇往還））、箱根ヶ崎は交通の要所として宿場町が形成されました。

瑞穂町郷土資料館では、昨年度に昭和15年頃、町制施行当時の青梅街道をテーマに企画展を行いました。

今年度は昭和20年代の日光街道の様子を振り返り、『昭和20年代の我が町（村）の暮らし－当時の日光街道を行く－』と題した企画展を開催しました。

企画展では、昭和20年代の日光街道地図をパネル展示し、そこに纏わる写真やエピソードを紹介しています。

『昭和20年代の我が町（村）の暮らし－当時の日光街道を行く－』展示風景

その他の主な事業

瑞穂町郷土資料館では、文化財保護審議会との共催事業として郷土歴史講演会を開催しました。

郷土歴史講演会では、企画展に合わせて『写真で見る瑞穂町の昔　明治・大正・昭和』というテーマのもと、昭和20年代の日光街道地図や街道の様子が分かる写真を取り上げて解説しました。

講演者は瑞穂町文化財保護審議会前副会長　滝澤福一氏で、多くの参加者の方からご好評を頂きました。

その他にも、瑞穂町郷土資料館では、村山大島紬伝承会の指導のもと、「みずほはたおり探検隊」を結成しています。

郷土の伝統的な絹織物「村山大島紬」の技術保存・織子の育成・村山大島紬の周知を目的として、瑞穂町在住・在勤・在学の小学生～大人まで、幅広い年齢層で楽しく交流しながら活動しています。

今年度の事業では、村山大島紬を知ってもらうため、初心者向けに機織り・染色（藍染め）の一日体験教室と、長期的に機織り・染色（草木染め）を学ぶことができる学習教室を開催しました。

この学習教室で制作した作品は、瑞穂町総合文化祭展に合わせて、平成23年10月28日～11月26日まで、生徒たちを中心に作品展を制作し、開催しました。

企画展と合わせて多くの方に来館して頂き、「みずほはたおり探検隊」の活動内容に共感を頂くことができました。

村山大島紬技術保存に関しては、後継者確保の困難という厳しい状況が続いていますが、今後は学習教室に参加した生徒たちが講師となり、村山大島紬の歴史・技術などの知識を掘り下げて学習し、また参加者自身が体験や学習を通して、村山大島紬を身近なものとして感じてもらえるように日々努力し、継続させていくことが課題となっています。

また、機織り染色に関する講座以外にも、講座や講演会を企画し、子供たちや地域の人々が郷土に親しんでもらえるよう、また身近に感じてもらえるよう、努力をしていきたいと考えています。

村山大島紬製織体験風景

経糸の綜絖とおし風景

奥多摩水と緑のふれあい館［活動報告］

奥多摩水と緑のふれあい館　堀口行雄

昨年３月11日に発生した東日本大地震は、被害こそありませんでしたが当館でもかなり揺れが感じられました。被災地周辺での揺れは大変だったと想像されます。

地震後３月中は閉館し、４月以降も計画停電による臨時休館や開館時間の短縮、夏場に入ってからも節電への協力等により７月いっぱいは変則的な開館を余儀なくされました。８月以降は通常の開館時間に戻しましたが、来館者数等についてはそれなりに影響がありました。

観光地の中にあるということもあり、地震後しばらくは自粛ムードが漂い、観光どころではないということも影響したようです。

本年度は来館されたお客様（特にお子様向けに）がより楽しんでいただけるよう展示コーナーの一部をリニューアルしました。また、周囲を豊かな自然に囲まれ、四季折々の彩色の変化が目の当たりに楽しめる場所に立地しているという当館の条件をいかし、館のPR活動に力を注ぐことや、水道局やJR東日本等、団体との共催事業の実施により入館者の確保に力を注いで参りたいと考えております。

今後も自然の博物館も併せ持った施設として奥多摩湖を訪れる多くの方々に楽しんでいただけるよう、管理運営を心がけていきたいと思っています。

23年度の当館の主な活動としては次のイベント等を実施しました。

- ○　４月・春のミニコンサート（２日間延べ４回公演）
  内容：ソプラノ歌手の共演
- ○　６月・水道週間（７日間）花鉢等配布
  （都水道局と共同）
- ○　９月・ヘブンアーティスト公演
  （午前午後の２回公演）
  内容：パントマイム・大道芸等
- ○　９月・水源地郷土芸能フェスティバル
  内容：小河内の郷土芸能（獅子舞２団体及び鹿島踊りの上演）
- ○　11月・秋のミニコンサート（２日間延べ４回公演）
  内容：都民交響楽団の演奏
- ○　９月～12月・奥多摩湖周辺の四季・風物等の写真展示コーナー展示一新
- ○　24年３月・川野車人形上演
- ○　この他　JR東日本「駅からハイキング」に協力、当館をゴールに設定

※24年度についても春・秋のミニコンサートを主に郷土芸能の公演等を予定しています。

※写真はヘブンアーティスト公演と郷土芸能フェスティバルでの獅子舞の上演

「伝統文化ものつくり体験－多摩川製鉄体験塾－」を実施して

福生市郷土資料室　青海伸一

福生市郷土資料室及び羽村市郷土博物館の共同で、平成23年度多摩・島しょ広域連携活動助成金を活用し、自分たちで集めた砂鉄から日本刀を作り上げるまでの一連の工程に触れる「伝統文化ものつくり体験－多摩川製鉄体験塾－」という子ども向け事業を実施しました。

この事業は、両市を流れる多摩川と、福生市郷土資料室における武州下原刀を中心とした日本刀コレクションに着目し、自然環境に親しみながら伝統文化について学ぶ機会を与える目的で、現代刀匠の佐藤重利先生、財団法人日本美術刀剣保存協会事務局長の後藤安孝先生、刀剣研磨の春藤秀樹先生による指導のもと実施しました。

途中台風の影響があり、当初の予定より１回少ない全

７回、７月から12月にかけて実施しました。刀についての学習から始まり、実際に多摩川河原へ出ての砂鉄拾い、日本古来のたたら炉の製作、たたら炉を使った製鉄、鉄の鍛錬の様子の見学、ペーパーナイフ作成体験、できあがった刀を研磨する作業の見学と、参加者に一連の日本刀製作工程に触れてもらいました。

この事業では、砂鉄拾いには磁石を用い、たたら炉を組む時には耐火レンガを利用するなど、現代社会ならではの道具も利用しながら体験を進めていきました。一方で、指導を進めてくださった佐藤先生から、昔の人はどのように砂鉄を集めていたのか、実際に鉄を鍛錬する時にはどういう道具を使っていたのかといった伝統的な技法に関する話から、砂鉄から刀ができあがるまでに鉄はどういう化学変化をしていくのかと言った化学的な話まで多くの質問を交えながら学ぶことができました。

参加した子どもたちはもちろん、同伴していた親御さんも伝統的な技術や知識に触れるごとにその魅力に引き込まれていることが、作業や見学時の集中度、目の輝きなどからもひしひしと伝わってきました。また、最終日刀を研磨する作業を見学している時には、集中して作業を行うピンと張りつめた空気というものが、子供にもちゃんと伝わっていると感じられました。

機械化の進んだ現代社会にあって、一つのものがどういう過程を経てどのようにできあがっていくのかということを、実際に順を追いながら考える機会というものは少なくなりました。まして日本刀のような伝統的なものつくりを目にする機会はほとんどありません。そのような中、自分たちで拾ってきた砂鉄から実際に日本刀ができあがるまでの一連の流れをその目で見ることは、参加した子どもたちにとって貴重な体験であったと思います。

福生市郷土資料室では、今後も幅広い展示や様々な事業を通して、一人でも多くの方に学びや発見、体感するきっかけとなる機会を作れるよう、新たな企画を実施していきたいと思います。

砂鉄拾いの様子

たたら炉を作っているところ

研磨の実演と解説を聞いている様子

できあがった刀と子どもたちの記念撮影

東日本大震災に思う

武蔵村山市立歴史民俗資料館　髙橋健樹

1　震災時の状況とその後

2011(H23).3.11、14:46、「オ！地震だ」の一言から始まった未曾有の大震災。その日は、2010年度の「ミュージアム多摩第32号」の第２回編集委員会議の最中でした。奥多摩町奥多摩水と緑のふれあい館の堀口さん、瑞穂町郷土資料館の高田・近藤さんの両氏、そして本資料館の髙橋・渡辺の計５人が、寄せられた各館の原稿の校正を行おうとしたその時でした。最初は、すぐ収まるだろう位の気持ちでそのままの姿勢で待ちましたが、少しずつ揺れが大きくなり、会議室から事務室へ移動、自衛消防において避難誘導班であった渡辺が数日前に実施した防災訓練さながらに入館者を誘導しつつ、全員が屋外へ退避。電柱や木々の異様な揺れを横目で見ながら、地震の終息を待っていた次第です。館を離れる時に「ピシ！ピシ！」と弾けるようなウォールケースのガラスが鳴っていたのが気がかりで、不安と心配が入り混じった複雑な感情を今でも忘れられません。

いつもの地震とは異なって「長い！」と感じました。後で知ったことですが、三陸沖のマグニチュード９の地震の直後に誘発された茨城沖などの連続地震であったために、かなり長い揺れを感じたようです。揺れが収まった後、館内に戻り被害を確認しまいたが、年中行事展で展示中であった七段飾りの雛人形が落ちていたくらいで済みました（後で、建物のひび割れが少し大きくなったと思われる個所を発見）。会議に参加されていた方々が、自分の館などに連絡を入れ、特に被害がないことを確認するのを横目で見ながら、地震の被害を確認するために点けたテレビに映し出された田んぼや街中を掛け登る津波の映像に釘付け。とてつもない被害が発生したことを実感するとともに、仙台にいる友人や福島にいる後輩のことが頭をよぎりました。即連絡を入れたのですが、それまで繋がっていた携帯を含めた電話が使い物にならず、心配が膨らんだことを鮮明に覚えています。後日の連絡で無事であったことが確認できましたので一安心でしたが、数日後に、兄からの電話で実家（茨城県石岡市）が被害にあった事を知り、地震被害の範囲が予想以上に広かっていたことを感じました。

そして、福島第一原子力発電所の事故発生とその後に続く放射能被害。詳細は説明の必要がないと思いますが，第二次世界大戦に匹敵（もしくはそれ以上）する日本歴史最大の災害（人的災害の部分も含めて）となりました。ちなみに、「福島第一原発事故」と報道されることが多いようですが、これは東京電力所有分です。福島には東北電力所有の福島第二原発もあり、やはり地震の被害を受けていますが、緊急停止後、冷温停止状態を確保していて、放射能漏れ等は問題がないようです。

地震・津波災害もその復旧・被害者の方々の生活復帰等と課題山積で、素人ながら政府対応に不満を持ちながら、義援金程度の支援しかできない自分にじれったい気持ちですが、放射能は生活圏を根本から脅かす深刻な事態となりました。放射能除染・放射能汚染土等の処理とこちらも問題が山積み状態です。これから生まれてくる子ども達のために“原発全面廃炉”と声を大にして言い続けたいと（個人的には）思います。

2　活動報告と震災後対応

2011.11.3、歴史民俗資料館は“開館30周年”を迎えました。“30年”の記念展示・講演会等を計画し、気合を入れて！と思っていた矢先の大震災でした。各地から聞こえてくるイベント・祭り自粛の知らせ、やはり心の揺らぎを覚えましたが、基本的には計画通りと心に決めました。節電等の制約はあったものの何とか実施に漕ぎつけ、文化財見学会と天体観測が雨天等で中止となりましたが、この後は、年中行事展「桃の節供」、自然観察会を残すのみで、予定通りに今年度の事業を終了させることが出来る見通しが立ちました。主査の指示や嘱託員２名の尽力によるところが大きく、感謝しています。

実施した事業は、４～５月の「年中行事展　端午の節供」に「企画展　峰の大幟」、７～８月に子ども展と８月の子ども体験教室、10～12月に「特別展　武蔵村山の弥生時代」と歴史講座「武蔵村山の弥生時代」、12月～１月の「年中行事展　お正月飾り」です。

特別な「耐震後対応」は講じておりませんが、展示においては特に借用資料について転倒防止策をより補強するとか、文化財見学会等で館外を利用する場合などの緊

平成23年度特別展「武蔵村山の弥生時代」の様子

急時連絡方法などは考慮する必要があると感じました。

3　今後の課題

９月ごろ東大和市立郷土博物館の木村さんとの雑談で、「日本博物館協会が震災ボランティアを募集した。１週間くらい行ってきたが、瓦礫の片付けも進んでいなかった。」主旨のことをお聞きしました。先述した福島県の後輩は須賀川市教育委員会の学芸員ですが、力を注いでいた長沼地区の文化財収蔵庫が、藤沼ダム（人工湖）の決壊で濁流に流されてしまいました。須賀川市は市庁舎をはじめ旧市街地の建物が被災し、さらに、他地域の被災者を受け入れる避難地区としても稼働していたため、長い間、流された文化財類は放置されたままであったようです。定年を１年後に控えるロートルに何ができるかは分かりませんが、この三多摩には「三多摩公立博物館協議会」が存在します。そして、「千葉県博物館協議会」との連携を模索できるほど会としての力が備わってきているようです。今後の課題として、このような震災だけではなく、個々の持つ技術・技量を対外的に活用する方法を模索することも大切なのではないでしょうか。

震災と最近の活動報告

あきる野市五日市郷土館　関根輝雄

〔東日本大震災当時の郷土館の状況〕

平成23年３月11日午後２時46分、東日本大震災が発生しました。その時五日市郷土館では職員２名がおり、来館者１名が２階を見学されていました。職員が来館者の無事を確認し、揺れが収まるのを待って外に避難誘導しました。館前の旧市倉家住宅には来館者はおらず、住宅内で勤務していた職員１名が囲炉裏の火を急ぎ消して屋外へ退避しました。

大きな揺れではありましたが、幸い来館者及び郷土館や旧市倉家住宅の施設、展示品や収蔵品等に被害はありませんでした。

〔危機管理の取組み〕

あきる野市においては、平成23年３月に「あきる野市危機管理基本指針」を策定し、これに基づいて「五日市郷土館施設管理用危機管理基本マニュアル」を作成しています。これは平素の安全管理はもとより「地震災害」、「地震災害以外の災害」及び「事故」などの非常事態の危機を対象とし、来館者の安全を最優先に行動し、来館者の避難誘導と職員の安全確認、施設の状況確認を行うなどの対策を定めています。また、危機管理基本マニュアルを策定したからといって、これに基づき対応や対策をするとしても安心・安全であるとはいいきれません。

このため、毎年おこなっている自衛消防訓練の際において、震災を想定して建物倒壊や火災など異常事態が起こりえることを職員一人ひとりが注意喚起し、緊張感をもって防災訓練を実施しこのマニュアルの具現化を図り、危機管理や緊急時に適切に対応できるようにしていきたいと考えています。

五日市郷土館の最近の活動報告

〔平成23年度における常設展示の一部変更と節電対策〕

展示替えを考えるにあたり、当館では展示している資料について、あきる野市の歴史を知る上で必要な展示資料は何か、あきる野市独自の資料は何か、見学者にわかりやすく見やすい展示になっているかなどの検討を行い館内の展示の部分変更を行いました。合わせて、節電の取り組みとして展示照明については従来の白熱球をすべてＬＥＤ電球に変更しました。その様子の一端をお知らせします。

１階の常設展示室では、歴史資料や市民から寄贈・寄託された郷土の生活用具や、民俗芸能、自然にかかわる

五日市郷土館外観

新たに展示した養蚕コーナー

資料、また化石などを展示しています。はじめに展示室入口にある日本で初めてフローレンス・ナイチンゲール記章を授賞した萩原タケ女史のコーナーでは、写真・展示プレートの追加や入れ替えを行なうなどと共に日本赤十字社で復刻された萩原タケ女史の記念号「同方」をはじめて展示しました。また、１階の展示室の中で、新設した展示は、養蚕のコーナーと消防のコーナーを新設しました。前者のコーナーはあきる野市の歴史を知る上では特に重要なものであり、移築復原された旧市倉家住宅とも関連する資料です。

２階の特別展示室では、五日市憲法草案関係資料を展示しています。今回の展示替えでは、このコーナーを拡充して、五日市憲法や学芸講談会の人たちが討論した討論題目の読み下し文などを追加して一般の見学者にもわかりやすい展示につとめました。

〔体験教室〕

平成23年度は、機織り、藍の生葉染め、芋ほり、もみすり脱穀、餅つきの５種類の体験教室行いました。毎年多くの親子に参加していただき大盛況の教室です。

〔天皇皇后両陛下の来館〕

平成24年１月23日の午後、天皇皇后両陛下が当館をご視察されました。萩原タケ女史や300万年前のミエゾウの化石、五日市憲法草案などをはじめ、館内の様々な展示資料を大変興味深げにご覧になられました。

平成23年度の活動報告

羽村市郷土博物館

当館では「多摩川とともに」をメインテーマに、羽村の自然・歴史・文化を伝えるため玉川上水、養蚕、中里介山に関する資料を館内に、また屋外には羽村の歴史を今に伝える「旧下田家住宅」などの常設展示を行っています。今年度については、次の主な企画展を行い羽村の歴史・文化等を紹介しました。

企画展

西多摩の風景47選～奥多摩いろは歌留多より～

昭和のはじめ、西多摩村（現羽村市）で製糸業を営んでいた羽村春市を中心に、この当時新しくつくられた「奥多摩」という地域を宣伝しようとつくられたいろは歌留多を展示した。

展示期間　４月１日～６月19日

企画展「西多摩の風景47選 ～奥多摩いろは歌留多より～」のポスター

企画展「西多摩の風景47選 ～奥多摩いろは歌留多より～」の展示写真

玉川上水かたちとやくわりのヒミツ

夏休み企画展として、都内の小学校４年生が社会科で学習する玉川上水について、羽村の取水堰を中心に、基本的な役割りを模型やパネルを使いわかりやすく展示した。

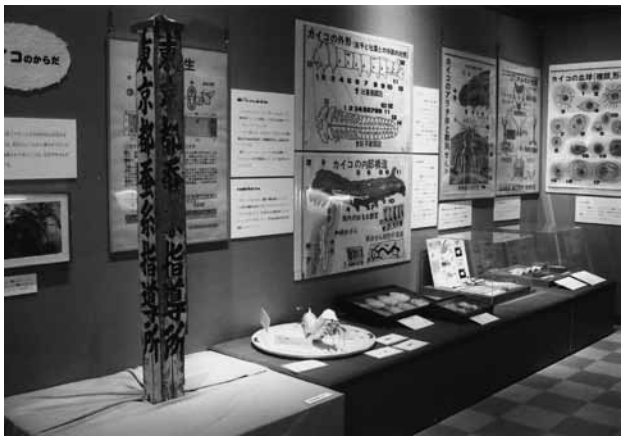
展示期間　７月２日～９月11日

企画展「玉川上水かたちとやくわりのヒミツ」の展示写真

カイコを大解剖！－旧蚕糸指導所資料より－

明治から大正にかけて養蚕が盛んに行われていた羽村にとって、「カイコ」は羽村の一時代を築いた、とても縁の深い生きものである。この企画展ではカイコの模型、繭のサンプル、顕微鏡など旧東京都蚕糸指導所での研究や普及のために使われた資料を通し、「カイコ」を様々な角度から観察した展示とした。

展示期間　９月23日～12月18日



企画展「カイコを大解剖！－旧蚕糸指導所資料より－」の展示写真

企画展「じいちゃの見たもの描いたもの～熊谷元一回顧展～」を振り返って

清瀬市郷土博物館

清瀬市郷土博物館では、平成23年10月８日～23日の会期で企画展「じいちゃの見たもの描いたもの　～熊谷元一回顧展～」を開催しました。

平成22年11月に101歳の天寿を全うされた「じいちゃ」こと、童画家・写真家の熊谷元一氏。長野県下伊那郡会地村（現・阿智村）に生まれ育った氏は、小学校教員を辞した後、昭和41年より清瀬市（当時は清瀬町）に移り住みます。その後、亡くなるまで清瀬を第二の故郷として心から愛され、長い間さまざまな活動をされてきました。

遺されたたくさんの童画や写真には、昭和から平成にかけての時代の移り変わりが克明に刻まれているとともに、そこから熊谷氏の温かな人柄をも感じ取ることができます。本展では、氏の写真や童画を中心とした数々の作品を展示し、その生涯を振り返るとともに、幅広く活躍された業績を紹介しました。

本展を企画するにあたり、長い期間にわたって幅広い活躍をされた業績全てを網羅することはなかなか難しく、視点を絞って３部構成の展示としました。第Ⅰ部「じいちゃの見たもの描いたもの」では、代表作となった写真集『一年生―ある小学教師の記録―』や絵本『二ほんのかきのき』をはじめとした作品を、第Ⅱ部「じいちゃ、清瀬のあゆみ」では清瀬に移り住んだ後、愛用の自転車で走り回って撮影した写真や、氏が携わっていた清瀬の自然保護の活動等について、第Ⅲ部は「じいちゃと郷土博物館」として、開館準備段階から関わってこられた氏が当館の事業の様子を撮影した写真を紹介しました。また、絵本や写真集など、氏のさまざまな関連書籍を取りそろえた閲覧スペース「じいちゃの小さな図書室」を日時限定で開設しました。

同時に第Ⅰ部と第Ⅱ部の会場の間には、準備中に募集した熊谷氏へのメッセージや思い出をパネルで紹介するコーナーを設けました。これは、氏が非常に気さくでたくさんの方々と交流を持ち、慕われた方であったことから、本展の開催にあたり、そのような人柄を来場者にも感じてもらいたいとの思いで市の広報やホームページ・新聞等で呼びかけを行ったものです。その結果、教え子の方、親しくお付き合いをされていた方、直接の面識はなくとも氏を敬愛されている方など―。さまざまな方が

第Ⅱ部「じいちゃ、清瀬のあゆみ」展示の様子

第Ⅲ部「じいちゃと郷土博物館」展示の様子

それぞれの思いやエピソードを寄せてくださいました。驚いたことに内容の重複がほとんどなく、氏の活動の幅広さを改めて実感するものとなりました。これらの寄稿いただいた文章は小冊子『じいちゃありがとう』としてまとめ、配布しました。

関連事業としては、「かろやかな歓びのテクネー　熊谷元一の世界」と題し、社会やメディアの変化と関連付けて熊谷氏の活動や業績を研究されてきた静岡大学教授・矢野敬一氏に、エピソードなどを交えながら講演いただきました。当日は、熊谷氏の故郷の阿智村から教え子の方々も駆けつけてくださり、氏を偲ぶ貴重なひとときとなりました。

会期中は、熊谷氏と関わりのあった方も多く来場し、氏を懐かしむ声や氏との思い出話などがあちこちから寄せられました。また、写真作品に「私が写っているのよ」と嬉しそうにお話される方や、自身の幼い頃の風景に重ねて懐かしく写真や童画をご覧になる方、アンケート用紙に氏への思いを綴られる方など、多くの方に良い企画展だったと高評価をしていただいたように思います。

当館では、過去に開催した熊谷氏の写真展に関連して、氏が撮影した写真のネガフィルムを多数所蔵しており、現在、デジタルデータ化とリスト化を並行して進めているところです。また、この企画展を開催することを知った方から新たに童画の寄贈をいただく機会もありました。約１世紀を生き、童画に写真にと幅広く活躍された熊谷氏こと「じいちゃ」の魅力はまだまだ語り尽くせません。改めてこれらの資料の整理を進めながら、「じいちゃ」の魅力を掘り起こし、紹介する機会を再び持つことができればと思います。

最後になりましたが、この場をお借りして、本展の開催に際し、ご協力をいただきました多数の皆様に改めて感謝申し上げたいと思います。

市有形文化財「小林家住宅」茅葺屋根葺き替え工事

立川市歴史民俗資料館　横山祐介

立川市幸町４丁目にある川越緑道緑地古民家園、市指定有形文化財「小林家住宅」で茅葺屋根をふき替える工事が、平成23年10月７日から平成24年３月２日にわたって行われました。

小林家住宅は江戸時代以来、旧砂川九番組に属してきた住宅で、母屋は砂川でも数少ない六間方（土間を除き６部屋で構成される）住宅で高い技術と優れた材料が使用されています。最大の特徴はオクの間で床の間、違い棚、書院などの座敷飾りは武家住宅に匹敵する格式を供えています。復元に先立つ解体工事で嘉永五年（1852）と書かれた部材が発見され、建築年代も明らかになりました。平成元年12月１日に市指定有形文化財に指定したのち、平成５年10月17日に川越道緑地の一角に移築・復元し開園の運びとなりました。

開園の後、平成17年初頭にも、一部茅葺屋根のふき替え工事は行われたものの、その北面部分は日ごろからの日照不足、雨水にさらされることでコケが繁殖する事態に。貴重なこの文化財保護のため、幾年かの予算要求の末、ようやく葺き替え工事が実現することとなったのでした。

実際の工事依頼は文化財修理を手がけ、移築・復元の時にもかかわった工務店さんに依頼。茅のふき替え作業は特殊な技術と専門的な知識が必要なことから茅葺専門の職人のみなさんにお願いしました。契約直後や工事期間中も含め大量の茅が富士山麓からトラックで運び込まれ、茅を整え、裁断、束ねるといった下処理をしたあと、冬の寒風に耐え忍びながら工事を行っていただきました。

また、平成24年１月26日と28日の両日には、現代では

うわー大量のコケが、、、

ひとつひとつ古い茅をはずしながら、進めてゆきます。

珍しくなっているこの工事の模様を、ひとりでも多くのみなさんにみていただければと、立川市文化財保護審議会委員や職人さんの解説をまじえながら見学会を開催しました。新聞各紙面に載ったこともあいまって、両日の総勢で市内外から67名の方々の来園がありました。

真冬の寒波が到来している中、参加をしてくれた方々の真摯に聞き入る姿や鋭いご指摘には、ある種の喜びと驚きを喚起させるものがありました。

こうして、屋根のふき替え工事は一応の完了をみることができましたが、小林家住宅では、通年行事としての農業体験学習をはじめ、茶たて事業等も開催しておりますので、リニューアルした古民家ともども是非ご来園ください。

事前に茅そのものについてご説明。

檜原村郷土資料館の現在の状況

檜原村郷土資料館　吉沢文夫

３月11日に発生した東日本大地震では多くの犠牲者を出し、被災した皆様には心よりお見舞い申し上げます。

さて、檜原村郷土資料館は学校統合により廃校となった学校跡地に建設され、昭和63年４月のオープン以来24年となりました。開館当初から５年間位は年２万人ぐらいの入館者がありましたが、年が嵩むに連れて入場者数は反比例していき、現在では年４千人前後まで落ち込んでいる状況です。

幸いにして東京都の公立小学校４年生の社会科副読本に檜原村が載っているため、都内或いは三多摩地区内の小学校が夏から秋にかけて、学習のために団体で来館されるため、これ以上は減少しないだろうと思っておりますが、入館者数の増員が今後の大きな課題となってくることは必定と思われます。

よって、当館では平成20年度に小会議室をミニギャラリー（使用料無料）に改良し、社会教育事業で実施する陶芸教室・墨絵教室・俳句教室等の作品展示会場として使用させると共に、ハイビジョン・ブルーレイによる「檜原歳時記（鑑賞無料）」を作成し入館者数の増員を図るべく実施致しましたが、思うような結果が出てないのが現状であり、今後更に検討を重ねていかなければならないと思っております。

又、原発の被災により使用電力の削減が盛んに叫ばれるようになったため、常時点灯する照明は全てＬＥＤに変更致しましたが、縄文土器等展示品の地震時の転倒防止対策がまだ出来てないため、24年度に対策を講じようと思っております。

23年度事業としまして「昆虫標本展」「野草標本展」「まゆだま飾り」「檜原村野鳥写真展」等を実施いたしましたが、子供たちに１番の人気は「昆虫標本展」でした。

この展示は村立小学校の元教諭が10数年を費やして檜原村内で採集した昆虫標本15箱448匹を、夏休み期間中展示したものですが、カブトムシ・ミヤマクワガタ・オオクワガタ・オニヤンマ等が含まれており、子供たちにはとても人気を得ていました。又、熟年の皆様には「まゆだま飾り」に人気がありました。この飾りについては寛永年間の頃、信州を旅していた越後獅子の親方「半五郎一行」が、柳の枝に繭や色紙で作った小判を吊り下げて商売繁盛と五穀豊穣を願ったのが始りとされておりますが、檜原村では「つげ」の木に団子とミカンを刺し、それに「麻」を細かく裂いて被せたものをタタミの上に飾り、家内安全と五穀豊穣を願う養蚕農家の小正月の行事となっておりましたが、養蚕の衰退と併行して数が減り、現在では皆無となってしまいました。

人が集う場所としての資料館

日野市郷土資料館　白川未来

平成23年３月11日、日野市の郷土資料館は行事も会合もない静かな日のはずでした。当館の建物は、昭和47年に開校した旧小学校舎を活用した教育センター・公民館・学童クラブがある複合施設です。大揺れの後建物管理を担当する教育センター事務室の放送により、グラウンドに出るなど、来館者の避難誘導や施設確認はおよそスムーズに行われました。もしも、出勤する職員が少なくて一般利用者が多い日にはこのようにはいかなかったのではないでしょうか。

この建物は、市内の他の小中学校のような耐震補強工

事が施されてはいません。揺れとガラスなどのきしむ音には、恐怖を感じました。昇降口のガラスにひびが入る被害がありましたが、展示資料には影響がありませんでした。

地震の後、資料館・公民館ともに閉館とはせず、学童クラブでは保護者を待つ児童の対応をしていました。資料館の事務室からは、展示室への来館者の様子が見えません。展示室の入り口を施錠した上で、来館者に対しては、事務室に声をかけるように案内掲示を行いました。そして、翌日予定していた多摩川での化石観察会の対応を・・といっても電話が全く通じず、結局当日に参加者へ延期の連絡を行いました（最終的には中止）。それでも連絡がとれない参加者がいたため、念のために集合時間に会場に出向きました。会場近くの河川敷グラウンドでは、何事もなかったかのように、野球が行われており、地震に対する温度差を感じました。

その後、余震や原発事故の影響の不安があるなか、節電しながら開館を行い、行事や会合の実施については、参加者の交通手段や内容によって個別に中止の判断を検討しました。

また、博物館特有の業務ではなく、市役所の一部署として、市民会館で中止となった行事への対応、毎日更新される計画停電情報の周知、避難者滞在施設への当番などの業務が生じました。当日の避難誘導も含め、これらの「人」に対する業務を通して、判断のぶれがどのように影響するのか、重く考えさせられました。３月13日、気象庁の発表「M７以上の余震が起こる確率が16日までに70％」による70％が的中していたら・・と未だに気がかりでなりません。人が集う場所であることを最優先とした判断が求められます。

平成23年度活動報告

小金井市文化財センター　倉澤淳子

小金井市文化財センターは、市内から発見された考古資料・古文書・民具等の文化財を保存・展示し、身近な郷土の歴史に親しんでいただくための施設です。この建物は『浴恩館』と呼ばれ、昭和６年から青年団講習所として使われた由緒ある建物です。講習所長であった下村湖人の小説『次郎物語』の舞台としても知られ、市史跡に指定されています。

平成23年度に行った主な活動を報告します。

●春の企画展「名勝小金井（サクラ）展」

玉川上水の名勝小金井（サクラ）の復活事業の開始にちなみ、江戸時代～近代の華やかな小金井桜について、錦絵や写真、ビデオ等でその歴史を紹介しました。

・期間　平成23年３月29日～５月５日
・来館者数　570人

●秋の企画展「小金井市の指定・登録文化財」

小金井市では今年度新たに指定文化財８件、登録文化財７件を指定、登録しました。指定・登録した文化財の種類は、土器、石器、民俗資料等さまざまで、時代も旧石器時代から昭和にわたります。

今回はそれらを一同に集め、展示紹介しました。

・期間　平成23年11月１日～12月25日
・来館者数　788人

●文化財講演会「文化財と科学」

秋の企画展で展示した、旧石器時代の石器群（写真参照）に関連し、上記のテーマで、黒曜石の産地を科学的に調べる方法とその成果について講演会を行いました。

・開催日　平成23年11月５日（土）
・講　師　二宮　修治氏（東京学芸大学教授）
・参加者数　12人

●はたおり教室

小金井市文化財センターでは、所蔵している機織機を活用し、市内の小中学生を対象に、伝統的な裂き織による技法のはたおり教室を行っており、毎年好評です。

・開催回数　６回（７月、８月、12月に開催）
・参加者数　37人

秋の企画展展示（荒牧遺跡出土旧石器時代石器群）

くにたち郷土文化館の最近の活動（展示を中心とした報告）

くにたち郷土文化館　安齋順子

平成23年度春季企画展は「くにたち写真探検展」と題し、昭和30年頃から現在までの写真を展示し、くにたちの町がどのように移り変わっていったかを、郷土文化館に残る資料とともに紹介しました。また昔の写真から、そこが今のどこの場所かを当てるクイズ形式のパネルなどを設置しました。親子で来館した見学者は当時を懐かしみ、また新たな発見に会話を弾ませていました。

「くにたち写真探検展」

夏季には企画展「どっこい用水は生きている～都市農業と生き物たち～」を開催しました。この展示では、くにたちを流れる府中用水と田んぼの関係、そこに生きる生き物たちについて、映像なども取り入れながら紹介しました。

また、この展示に合わせ、用水周辺に生息するハグロトンボの調査を、募集に応じた市民と共に行いました。中学生を含む市民と共に、用水に生息するハグロトンボにマークを付け生息ポイントや発生時期などを調査しました。この流れを受けて、近隣に住む方々がハグロトンボを写真に撮って館に報告して下さるなど、館と地域の人々との新たな交流の形が生まれてきました。

「ハグロトンボ調査隊」

秋季特別展は、谷保に生まれくにたちで制作活動を続けられている郷土の芸術家、関頑亭の作品を展示した「関頑亭～谷保から国立へ～」。関頑亭は府中高安寺の仁王像や中野宝仙寺の弘法大師坐像などを制作した作家で、現在93歳。今回の展示作品には、迫力ある脱活乾漆造による彫刻も展示しました。また、作家が10代の頃に描いた多摩の風景の数々は、無垢な心のままに描かれた朗らかな中に力強さを持つ作品です。作家のあゆみを振りかえる作品の数々に、じっくりと作品を鑑賞する見学者が多く見受けられました。

「関頑亭～谷保から国立へ～展」

年明け１月からは、小学校３年生が学ぶ「むかしの暮らし」のカリキュラムに合わせ、当館では毎年「民具案内」という体験事業を行っています。この体験事業にあわせ「むかしのくらし展」を開催しています。展示資料は主に明治から昭和30年代の生活の道具です。小学生の子どもたちの『身近なむかし』には、「親の子どもの頃」や「祖父母の子どもの頃」がありますが、今の小学校３年生の祖父母も、戦後生まれの方が増えていくなかで、その『身近なむかし』にも触れつつ、いっぽうで、電化製品が普及する以前の生活についても、学んでゆけるようこころがけました。

昨年は震災に見舞われ、国立市でも計画停電があり、今私たちが当たり前としている暮らしが、不意に変わることがあることを多くの人が感じた年でもありました。

先人の歴史や、郷土の人々の暮らしぶり、そこに息づく人と人との関わり、人と自然との関わり、それらを学び考えることは、未来を考える上で、ひとつの灯となるのではないでしょうか。市民に身近な博物館として、その一翼を担えればと思います。

震災と博物館

東大和市立郷土博物館　坂本卓也

３月11日　２時46分の館内

あの揺れがあったとき、博物館ロビーには20～30名のお客さんがいらっしゃいました。それもデイケアサービスの高齢者がほとんどです。職員がすぐに声をかけ、また展示室やトイレを見回りました。お客さんの多くは、3時からはじまるプラネタリウムをご覧になる方々でした。

このときはまだ、大きな余震が起こることを、恥ずかしながら覚悟していませんでした。３時から通常通りプラネタリムがはじまり、しばらくするとまた大きな揺れが…。今から思えば恐怖は感じていたものの、のん気だったと反省せずにはいられません。

その後、博物館で管理している市内の施設を点検に行きました。幸い大きな被害はありませんでした。博物館に戻ってから、津波に飲み込まれる東北の町をテレビで見て愕然としたのでした。

講座や観察会をどうするか？

３月19・20日は「体験講座　はじめての草木染め」を予定していました。東村山ふるさと歴史館との共催事業です。16日に東村山市の担当者から電話がありました。「東村山では市の方針として、４月までのイベントは見送る」とのことです。

計画停電がいつどのように行われるかわからず、鉄道やバスの運行も不定期。申し込みをされていた方にも電話で中止の旨を伝えると、「残念ですけど、仕方ないですよね」。

一方、21日には自然観察会も予定されていました。カタクリなど早春の花をメインとした観察会です。こちらも中止にするつもりで講師の方にもお断りの電話を入れていました。しかも当日は冷たい雨。

ところが、６名の方がいらっしゃったのです。「家にいてもテレビは震災関係ばかりで、気持ちが沈んでしまうので」という方。また茨城で被災し、家族のもとへ避難されてきた方もいらっしゃいました。すでにガソリンスタンド渋滞ができていた頃でしたが、市外から車で見えた方もいます。

結局この日は、６人の参加者を職員が案内する「ミニ観察会」として開催しました。傘をさしながらの観察でしたが、カタクリの半開きの花はみなさんを励まし、少しだけ明るい気持ちにさせてくれました。

いつ？本当に消えるの？

計画停電が発表され、館内でも職員間でいろいろな議論がなされました。

「こんな時に、プラネタリウムの投影に電力を使っていいのか？」

「国立の博物館はみんな臨時休館らしいよ」

「常設展示室の照明も落とそうか」

一般来館者が入らない管理部門の照明はすべて落とし、一部の空調、エレベーター、視聴覚展示などの電源も切りました。そのため昨年よりも消費電力は３割から４割減に。それでもお客さんからの苦情はほとんどありません。

わたしたちも含め市民のみなさんが、いちばん困ったのが計画停電ではないでしょうか？いつ消えるのか、本当に消えるのか、自分の住んでいるエリアはどのグループなのか、当初ははっきりしませんでした。しかも同じエリアなのに消えないところもあり、不公平感を感じ、よりストレスを感じたものです。

当館ではロビーにホワイトボードを出し、市からのお知らせとともに計画停電情報を書きました。ふだんから多量のエネルギーを消費している生活を、いやでも見直す毎日でした。

今後の博物館

わたし自身、阪神淡路の震災のときはボランティアで神戸に行きました。また、今回は文化財担当の職員が、陸前高田市文化財レスキューに赴きました。全ての職員が、震災直後から博物館業務をとおして、来館者の方と接してきました。

震災後、博物館としてどのような情報を市民に提供できるのか考えました。博物館の調査研究、展示、教育普及活動が市民の方の震災後の生活に何か役立てないか、ということです。

地震関連の展示をすることで、日ごろからの防災意識を高めることもそのひとつでしょう。また、震災後気持ちが沈みがちな方を狭山丘陵に案内し、気分転換をはかってもらうという方法もあるでしょう。

博物館法第３条にも、こう記されています。「博物館は、その事業を行うに当っては、土地の事情を考慮し、国民の実生活の向上に資し、更に学校教育を援助し得るようにも留意しなければならない。」

これからは、より来館者一人ひとりの顔を思い浮かべ、博物館活動を展開していくべきだと思います。

多摩ニュータウン40周年

パルテノン多摩歴史ミュージアム　清水裕介

当館が位置する多摩ニュータウン（以下、多摩NT）は、平成23年３月に入居開始から40年目を迎えました。公的な多摩NT開発が既に終了していること、初期入居地区である諏訪２丁目住宅で建て替え事業が開始されたことで、多摩NTの40周年は「再生」という言葉とともに取り上げられました。

諏訪２丁目住宅の建て替えは、多摩NT内の団地としては最初のものであること、また元の団地が５階建て23棟・630戸という規模の建て替えは国内最大級であるとして、たびたび新聞・テレビなどでも取り上げられました。

取り壊し工事の開始にあたり、当館では、建替組合に協力を依頼して、７月に玄関ドアなど、取り外し可能な一部の建具を搬出しました。これらは多摩市教育委員会の所蔵資料として保存されることとなり、11月には当館の常設展示内で「団地サイズ」や建て替え事業が開始されたNTの現在に関する資料として、玄関ドアの展示を開始しました。

当館では、博物館ボランティアとして、多摩NT内や多摩市域の新旧比較写真を撮影する「定点撮影プロジェクト」が活動していますが、担当を含め、このメンバーにとって、見知った団地が取り壊されていく様子は、現在の地域の姿もいつかは大きく変わるであろうことを実感させ、現況を撮影し整理・保存する活動の意義を再認識する機会となりました。

来年度は当館が開館25周年を迎えることになり、記念事業として「つながる」をテーマに、館全体でさまざまな催しを計画しています。博物館部門では、現在の景観を記録に残すため、航空斜め写真の撮影・展示を行います。地域の過去と現在を「つなぐ」身近な資料として、地域の方々にお届け出来るよう、現況の撮影は多摩NTの開発前・開発中の写真を元に行う予定です。

平成23年度事業報告「新規復元建造物の公開について」

江戸東京たてもの園　髙橋英久

江戸東京たてもの園では、平成22年度より開始された新規収蔵建造物（万徳旅館・大和屋本店）の復元工事が終了し、平成23年９月３日より公開となりました。当園での建造物の復元・公開事業はおよそ10年ぶりでした。この復元・公開事業は、展示資料数が増えるだけではなく、下町の町並みを形成するうえでも当園にとってとても大きな事業であり、関係者一同ワクワクする心持ちで待ちわびていました。これにより復元建造物は全29棟となり、今後は西ゾーンに１棟の復元工事を平成25年３月に完了し、園内全30棟をもって完成となる予定です。

公開に際しては、記念セレモニーを行うとともに、大和屋本店（乾物屋）にちなんだ「おぼろ昆布とかつお節の実演」や万徳旅館にちなんだ「奥多摩・諸国〝うまいもの市”」、また、たてもの園の生みの親の一人でもある藤森照信先生の講演会「建築探偵の成果としての江戸東京たてもの園」、隣接する小金井公園を舞台とした「めざせ！たてもの園クイズ博士　小金井公園クイズラリー」、昔の暮らしや建物を落語によって楽しんでもらおうという「えどまる寄席　林家たい平独演会」など、時と場所を変えながらさまざまな関連事業を実施しました。今回の公開をきっかけにより多くの方に復元建造物を見るだけではなく、参加して楽しんでいただけるよう事業を展開しました。

万徳旅館

【万徳旅館】

現在の青梅市西分町にあった万徳旅館は、江戸時代末期から明治時代初期に建てられたと推定されます。もともとは、青梅街道に面した場所に建っていました。木造２階建て、屋根は杉皮葺き（一部とち葺き）ですが、今回の工事では、杉皮の上に鉄板を葺いています。外観は、何本もの腕木が壁に取り付き、「出桁」と呼ばれる長い横材を支える「出桁造り」という形式が特徴です。建物の内部では、昭和20年代に旅館として営業していたころの様子を再現しています。

【大和屋本店（乾物屋）】

1928（昭和３）年に創建された大和屋本店（乾物屋）は港区白金台の、通称目黒通り沿いにあった木造３階建ての商店。伝統的な「出桁造り」の形式と「看板建築」の特徴を合わせもったユニークな建物です。昭和10年代前半までは乾物屋、その後はお茶などを販売していました。公開にあたり、店舗部分は鰹節や昆布、スルメ、海苔、豆、鶏卵などを販売していた昭和初期の乾物屋の様子を再現しています。

大和屋本店（乾物屋）

『多摩のあゆみ』第144号「戦後多摩の公民館活動」

（財）たましん地域文化財団　歴史資料室　坂田宏之

当財団の季刊郷土誌『多摩のあゆみ』の第144号（平成23年11月15日刊行）は「戦後多摩の公民館活動」を特集テーマとしました。内容は以下の通りです。

- 小林文人「三多摩の公民館活動の歩みと活動－一九六〇～七〇年代を中心に－」
- 徳永　功「国立市公民館－誕生のいきさつと都市公民館への模索－」
- 進藤文夫「「三多摩テーゼ」作成の頃と、市民活動のあり方の変化」
- 穂積健児「小平市公民館の活動」
- 山﨑　功「「青年学級」から「青年講座」へ＝そして昭島の公民館づくり運動へ」
- 野澤久人「一九六〇年代から七〇年代の西多摩郡の社会教育」
- 霜島義和「稲城に公民館をつくる－一九六〇年代の女性の学びを中心に－」
- 大石洋子「町田市公民館の活動」

公民館は、戦後日本の社会教育の地域基幹施設として、設置が構想されました。東京ではまず農村部であった三多摩に設置が始まります。1960年代、多摩地域の急激な都市化を背景に、都市住民としての文化・教養を重視し、生活の諸問題を考える学習で市民がつながり合う「都市型公民館」としてのありかたが模索されます。そして公民館職員の組織的な研究・実践は『新しい公民館像をめざして』（通称「三多摩テーゼ」、東京都教育庁社会教育部、1974年）という綱領に結実します。本特集では、1960～70年代に「三多摩テーゼ」作成に向かう経緯、多摩各地の公民館で行われた実践を、当時の公民館担当者にご執筆いただく形で記録しました。

小林文人氏・徳永功氏・進藤文夫氏のお三方は、三多摩テーゼ作成の立役者ともいえる方々です。小林氏論考は特集の概説です。1960年代前半までの東京都の公民館活動の低迷状況をふまえ、60年代後半からの公民館職員集団の活動の活発化や、牽引車的役割を果たした国立市公民館の活動の意義を紹介します。徳永氏論考では、くにたちの文教地区指定運動をベースに生まれた国立市公民館の活動、市民大学講座や保育室の発祥・実践などが述べられます。そして図書館建設が推進される都政のもと、どのように三多摩テーゼへと結実したか、舞台裏の記録が進藤氏論考です。他にも小平市公民館、昭島市公民館、福生市公民館を中心とした西多摩の社会教育、稲城市公民館、町田市公民館の活動史を紹介しています。また昨年老朽化により取り壊された日の出町公民館が連載「洋風建築への誘い」で取り上げられ、144号は一大公民館特集ともいえる内容になりました。

「三多摩テーゼ」は、その後の日本の公民館における社会教育活動や施設、職員のありかたにも大きな影響を与えた綱領です。そうした動きを本特集で当時の担当者の方々に記していただけたことは、大変大きな意味のあることではないかと思っております。

平成23年度の広報活動について

東京都埋蔵文化財センター　広報企画係

平成23年度の年間の企画展示テーマは「赤き縄文から青き弥生へ」となりました。（写真左上）

昨年度まで「多摩丘陵の縄文集落」「縄文人がやってきた」「縄文生活」「縄文人のくらし」「あっ、縄文だ」と縄文時代に絞ったテーマを続けてきました。

これは、小学校の教科書に記載されていない縄文時代について、児童たちに実物に触れ、理解を深めさせるためにも当センターを活用しているという先生方の声が多かったこともあり、縄文時代に特化した企画展示を行ってきたからです。

今年度は、縄文時代から弥生時代へどう歴史が流れていったかを分かりやすく展示してみました。メインになる展示台には、赤色顔料を多用した土偶から赤き縄文時代、青銅器が作られた時代から青き弥生時代として象徴付けるモニュメントを展示しました。

東日本大震災の影響により、土器が10数個体壊れたりして３月まで休館を余儀なくされましたが、どうにか４月の小学６年生の団体見学に間に合い５月までに8000人近い児童が見学に訪れました。

展示方法としては、数多くの縄文土器を露出展示し、見学者に見るだけではなく、実際に直接触ってもらってより縄文時代を感じていただくことを重視した展示にしました。また、最近では触るだけでは物足りない見学者も多く、色々な体験が出来るように各種の体験コーナーを設けております。特に人気があるのは、火おこし疑似体験と石皿と磨石でのドングリ磨り潰し体験です。これは、年齢層関係なく人気があります。

今年度行事では、縄文ワクワク体験祭（写真左下）他、団体との連携事業数を増やしました。区部との親子縄文土器作り教室や、新たな企画として中世山城探訪のバスツアーを設けました。

また地元の団体の事業に参加した「多摩くらふとフェア」（写真右下）で勾玉作りを行いました。

このように今年度も積極的に東京都埋蔵文化財センターの名を広め、より一層の利用をしていただき、身近な施設であるよう努力を続けているところです。

平成23年度活動報告

集合住宅歴史館　野原亜沙子

集合住宅歴史館は、(独) 都市再生機構　技術研究所の中の施設のひとつで、日本住宅公団時代に建設された団地の一部や、同潤会代官山アパートといった、歴史的に価値の高い集合住宅を移築・復元し、集合住宅建設技術等の歴史・変遷を展示公開しています。

一般公開

集合住宅歴史館が設置されている（独）都市再生機構　技術研究所では、まちづくりや集合住宅に関する先進的な調査研究や技術開発・試験を行っており、その一部を広く一般に公開しています。敷地内には、実験・研究用のものが10施設、展示・公開用のものが６施設あります。展示・公開用施設は事前予約制で見学可能となっており、毎年多くの方々にご来場いただいています。

３月の震災の影響で、計画停電の予定に合わせて公開時間を短縮するといった対策をとったこともあり、一時的に来場者数が減少しましたが、平成23年度は、1477人（平成24年１月現在）の方にご来場いただきました。また、海外のお客様も、震災後のキャンセルが多く、11カ国、120人のご来場でした。

特別公開

研究所では毎年５月に「特別公開」という事前予約なしで所内をご覧いただける日を設けています。通常は一般公開していない振動実験棟や風洞実験棟を公開したり、高齢者体験等のイベントも企画しています。平成23年度は「明日の団地を考える　～安心・快適・エコライフ～」をテーマに開催しており、ＮＰＯ法人緑のカーテン応援団による「緑のカーテン事例紹介」といった報告会等も行いました。

来場者数は２日間で1163人と、こちらも多くの方にご来場いただきました。今年も、５月に特別公開を開催する予定です。

金属探知機による宝探し（左）と
車椅子を使用した高齢者体験（右）

特別企画「昆虫展～櫻井標本コレクション」

多摩六都科学館　展示・学習室　原朋子

平成23年11月26日（土）より、多摩六都科学館では「特別企画　昆虫展～櫻井標本コレクション」を開催しています。ここで展示している標本は、当館所在地に隣接する東久留米市市民である櫻井孜さんより平成23年10月にご寄贈頂いたもので、今回初めて一般公開いたしました。

櫻井さんは昭和30年代後半に東久留米市に居を構えられてから約50年にわたって、自宅周辺を中心に、主にチョウ類の採集をされてきました。子どもの頃から昆虫が大好きだったということに加え、当時の急速な開発による環境の変化によって、見かけるチョウの種類がどんどん減っていく様子に「地域の自然の記録を残さなければ」という思いを抱かれたことが、採集を始める原動力だったと伺っています。そのような目的のもとに集められた標本が多くを占めていたため、コレクションの約半分は東京大学総合研究博物館に収蔵され、昭和初期から現代に至る東京の昆虫種の変遷の研究に資料として役立てられることにもなりました。

よく、一般の方からの標本寄贈のお話は、標本のコンディションや寄贈にあたっての要望が施設側の受け入れ条件と合致しないことが多く、なかなか難しいと言われます。今回は、コレクションが個人所有のものとしては大変コンディションが良かったこと、また標本箱の組み換えや標本の取捨選択の判断をすべて科学館側に委ねて頂けたこと等、施設にとってはとてもいい条件での受け入れが叶いました。始まりは「粗大ごみになるくらいだったら、科学館で役立ててほしい」という櫻井さんからのお申し出でしたが、標本整理にご協力くださったむさしの自然史研究会（代表：須田孫七先生）のご尽力もあり、地域の自然遺産とも呼べるものを、教育普及と研究とに生かす道をつけることができたのは、何よりの幸いでした。

最近は子どもだけでなく、大人でもチョウを捕まえた経験のある方は少なくなっています。展示室を訪れた子どもたちにはチョウの種の多様さや擬態について、大人には環境変化による生息種の変化などについてよく説明していますが、今までチョウとほとんど接点のなかった方でも標本を見て興味を持たれ、この展示が身近な自然を見つめ直し、考えるきっかけとして、とても効果的に働いていることを感じます。

現在は標本のお披露目を兼ね、昆虫展第１部として櫻

井さん自らが日本各地で採集されたチョウ類の標本を集めた「日本のチョウ」を公開しており、2月9日（木）からは内容を入れ替えて、モルフォチョウなど子どもたちにも人気の華やかなチョウを集めた第2部「外国のチョウ」を展示いたします。特別企画の期間が終わってからも、今回公開しなかったものを含め、様々な場面で標本を活用し、市民の方からご提供いただいた資料とご意思を広く伝えていきたいと考えています。

公開初日、研究のため育てた「種間雑種」の標本を背に左から須田孫七氏、櫻井氏夫妻、当館館長

展示会場のようす

国立ハンセン病資料館平成23年度企画展の紹介

国立ハンセン病資料館　田代学

平成23年度は春季企画展として「かすかな光を求めて－療養所のなかの盲人たち－」を4月23日から7月24日まで開催しました。第1コーナー「恐怖、絶望、そして生きるために」では失明に至る課程での恐怖や絶望とそこから生きるために立ち上がろうとした姿を示す証言を壁一面に配しました。第2コーナー「光をもとめて－盲人たちの活動－」では各療養所の盲人会や全国ハンセン氏病盲人連合協議会の活動、文化活動を展示し、失明の絶望から歩み出した盲人たちがさらに自分たちの可能性を信じて活動してきた姿を示しました。最後の第3コーナー「盲人たちの今－現状と課題－」では、高齢化や後遺症の悪化で不自由者棟へ盲人が住まいを移している中、現在どのような日常を送っているのかを、写真や活動を示す実物資料で展示しました。

同期間中には付帯事業として、6月12日に講演会「多磨盲人会ハーモニカバンドとの思い出」を、7月10日には朗読コンサートを開催しました。講演会では多磨盲人会ハーモニカバンドのメンバーと交流のあったタケカワユキヒデさん（ミュージシャン）をお招きし、当時の思い出をお話いただきました。朗読コンサートでは、療養所内の盲人の方々が生み出した文学作品を宴堂裕子さん（女優）、小池保さん（元アナウンサー）に朗読していただき、渥美知世さんにアコーディオンを演奏していただきました。両イベントとも大変盛況でした。

第2コーナー「光をもとめて－盲人たちの活動－」

2011年に全国ハンセン病療養所入所者協議会（全療協）が結成60年を迎えました。この全療協60周年を記念するとともにとかく目が向けられることの少ない全療協運動と戦後のハンセン病政策の推移について一般の方々にも伝えるため、秋季企画展として「たたかいつづけたから、今がある－全療協60年のあゆみ－1951年～2011年」を10月1日から12月27日まで開催しました。結成から60年を迎えた全療協の足跡を、主に写真と映像とで追いました。

この企画展は全療協から全面的なご協力をいただくことで実現したものです。始めに2011年の第72回定期支部長会議で使われたスローガンや全療協旗、会議の様子の写真とこれまでの全療協運動を伝える実物資料等を配し、その後写真で全療協の歩みを追い、最後の映像コーナーで全療協運動の当事者による証言映像を見てもらう展示構成としました。映像は全療協運動に関わった13人の回復者の証言を集めたもので、写真のコーナーと同じく11テーマで構成したものです。写真で見た全療協運動の歴史を、今度は当事者の声で聞くという相互補完的な作りとしました。11テーマの構成は「全癩患協誕生」「らい予防法闘争」「らい予防法闘争以後」「看護切替と六・五闘争」「生活費の確保」「医療の充実」「沖縄の『本土並み』」「施設整備」「らい予防法改正・廃止」「国家賠償請求訴訟」「熊本地裁判決以後」です。最後のテーマでは、厚労省交渉やハンセン病問題対策協議会、将来構想の具体的な事例など、現在とこれからを考えていく上で重要な全療協の役割について示しました。映像は全体で２時間６分という長大なものになったため、開始時間を決めて１日に３回上映しました。

同期間中には付帯事業として連続講演会「わたしの運動の記憶」を４週に渡り開催しました。11月12日佐川修多磨全生園自治会長を皮切りに、19日平沢保治前多磨全生園自治会長、26日神美知宏全療協会長、12月３日鈴木禎一元全患協事務局長に講演いただきました。講演会は企画展で展示した写真を選んでいただき、スライドで映しながら当時の記憶をお話しいただく形です。毎週のように雨に祟られたこともあり、来場者は少なかったものの、質疑では会場から適切な質問や意見が比較的多く出されました。

平成24年度の春季企画展では、社会復帰をテーマに企画展を行う予定です。ハンセン病が治る時代になっても差別や偏見によって社会復帰は困難を極めました。社会復帰にかけたハンセン病回復者の姿を伝えたいと思います。

平成23年度秋季企画展の様子

地震時の状況と最近の活動報告

八王子市こども科学館（サイエンスドーム八王子）　森　融

３月11日（金）の地震時、館内では１階２階の展示室、プラネタリウムにお客さんがおられ、プラネタリウムは投影中、２階パソコン室ではパソコン教室を開催中でしたが、すぐに各階の避難通路から館外へ避難していただきました。平日の午後ということで、午前中に来館した中学校や幼稚園の団体はすでに館を離れており、展示室には個人のお客さんが十数人という状況でした。

幸いに、人的にも物的にも全く被害が無く、書棚から本が落ちることもありませんでした。

約30分後の大きな余震でも避難をし、午後４時までの予定のパソコン教室は切り上げて終了することになりましたが、３時30分からのプラネタリウムは、お客さんの希望もあり投影をおこないました。

翌日の12日（土）は通常通り開館し、夕方観望会も予定どおり開催しましたが、参加者は15名と少ない人数でした。また、この日復旧したインターネットの地震情報では、当館の向かいの公園に設置されている気象庁の地震計で、昨日の本震は震度５弱でした。

13日（日）、市では各施設は当面午後５時以降は閉館することになり、当館では19日（土）夕方に開催する予定であった星空コンサートを中止することになりました。満席近くの予約が入っていたのですが、手分けして中止の電話連絡をおこないました。

その後、電力不足に協力する形で17日から休館することとなり、職員は交代で市役所本庁舎の停電総合相談センターで市民の方からの電話受付や駅頭での募金活動に従事し、この間に計画停電もあり、お客さんが来ないさみしい春休みが始まりました。

４月１日から通常開館に戻り、２週間ぶりに館内に子どもたちの歓声が戻った時にはホッとした記憶があります。

23年度が始まってみると、遠出控えのためか当初から入館者数が昨年度を上回り、夏休みにはプラネタリウムが満席になることもたびたびでした。

昨年度は小惑星探査機はやぶさブームで、開館以来最高の入館者数を記録したのですが、夏休みが終わった時点で昨年より3,800人の増。その後もお客さんは増えて、12月までで昨年度を8,000人上回っており、今年度の入館者数は80,000人を超えそうです。

現在は、来る５月21日の金環日食（多摩地区では天保

10年以来173年ぶり）や６月６日の金星の太陽面通過（次回は2117年）という大きな天文現象を控え、どのような普及ができるかと事業を計画中です。

重要文化財指定とガイドツアー開始

国立天文台　天文機器資料館　中桐正夫

国立天文台天文情報センターに2008年にアーカイブ室が設置され、130年以上の歴史のある国立天文台に残る観測装置（いろいろな望遠鏡の類）、測定装置、天体写真乾板、資料等の貴重な歴史的遺産の収集を始めた。また、2000年７月から始めた国立天文台の常時一般公開は、2007年４月からその区域を約２倍強に広げた。その拡大した常時一般公開の区域にあったレプソルド子午儀室に、1880年にドイツでつくられた大子午儀（レプソルド子午儀）が現存していることが発見された。この大子午儀は1881年、当時の海軍観象台（当時は麻布にあった）が購入し、1888年に東京大学天象台、海軍観象台、内務省地理局が統合され、東京大学東京天文台（国立天文台の前身）が海軍観象台があった地に設置された東京大学東京天文台に移管されたものである。このレプソルド子午儀は麻布時代には日本の時刻、経度決定に用いられ、運よく関東大震災の難を免れ、三鷹に移転後は恒星の位置観測に用いられ、三鷹における黄道帯星表、赤道帯星表などの成果を出し、1950年代でその役目を終え、その建物は役目を終えた器材の倉庫に化け、大子午儀はその存在を忘れられていた。その子午儀が2007年に発掘され、復元整備され、さらに国立天文台に残されていた各種の子午儀を集めレプソルド子午儀室は子午儀資料館とされた。

その大子午儀が2008年に文化財として申請され、2011年６月、文化庁から歴史資料163番目の重要文化財として国立天文台初めての重要文化財として、また三鷹市でも初めての重要文化財として指定されたのである。

また、アーカイブ室では広大な敷地にあり、役目を終

レプソルド子午儀

太陽塔望遠鏡

天文機器資料館

ゴーチエ子午環

えた自動光電子午環の建物の有効利用として、この望遠鏡フロアに国立天文台に残された歴史的な望遠鏡、測定機などの収集を進め、2008年には天文機器資料館とした。また、1930年に完成した国立天文台の太陽塔望遠鏡は1960年代終わりにその役目を終え、電気、水道も止められていたが、そのユニークな姿が1998年に登録有形文化財に登録された。2009年からこの登録有形文化財の建物の整備を進め、雨漏りがするなど傷んだ建物修復をする一方電力を回復させ、大きな分光器室を分光器資料館として整備を進めている。こういった活動が発展し、天文博物館を目指しているが、準備段階から東京都三多摩公立博物館協議会に参加させていただいている。

しかし、子午儀資料館をはじめ天文機器資料館、太陽塔望遠鏡はほぼ博物館状態であるが、それらの人員配置が出来ないこともあり、それらの収蔵し展示した歴史的遺産を常時公開の一般公開で見ていただけないことを残念に思い、2011年６月にはそれらの中に入れるガイドツアーを開始した。第１、３火曜日は登録有形文化財コース、第２、４火曜日は重要文化財コースとして通常は見ることが出来ない歴史的遺産をガイド付きで公開している。

国立天文台には、これらの歴史的遺産の他に、広い敷地（約10万坪）に点在している測地学上の史跡があり、2012年度からはこれらを含め日曜日も行うガイドツアーに拡大していく予定である。そして、これらたくさんの資料館、史跡をサテライトとした天文に特化した専門・分散型博物館を目指している。